秋田県立博物館研究報告　第８号　１－36ページ　1983年３月

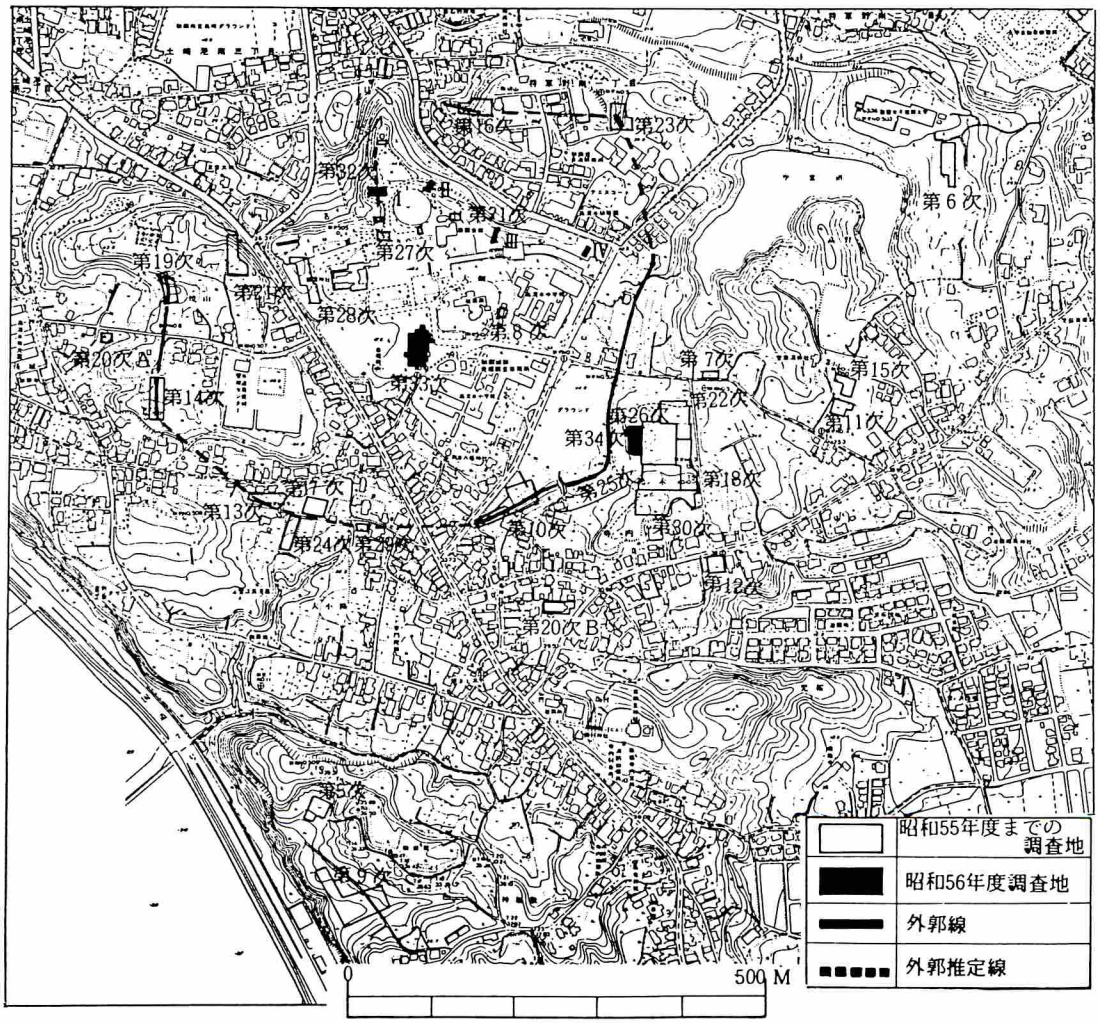
秋田城内外検出の竪穴住居跡

庄　内　昭　男

Ⅰ　はじめに

秋田城跡は，市街地から旧国道７号線を北に３㎞程行った秋田市寺内にある。遺跡の範囲は，標高50ｍを最高位とする独立丘陵である高清水丘陵のほぼ全域におよんでいる。丘陵の西方下500ｍを旧雄物川が北流し，1.3㎞程で日本海に至る。北西からの季節風をうけ，丘陵北西部には２～10ｍの飛砂層が堆積している。

秋田城の歴史は，『天平五（733）年，出羽柵を秋田村高清水岡に遷置す（続日本紀）』に始まり，天平宝字年間（757～764）に秋田城に改称されたとされる。



第１図　秋田城跡発掘調査地域図

秋田城には，一時出羽国府が移っていたと考えられ，その後，郡衙が併置されており，古代における軍事・行政の中心的機関として存在していたものである。

秋田城跡には，昭和47年秋田城跡発掘調査事務所が設置され，継続的に発掘調査が実施されている。昭和47年以来の調査の主眼は，外郭線の構造および規模を

調査次	発掘調査地	秋田城跡との位置	検出遺構
5	神屋敷・勅使館西	南外郭線より350m	土塁跡　ピット群　溝跡　カマド跡
6	高野・空素沼東	東外郭線より400m	検出遺構なし
7	高野・運動場東	東外郭線より100m	二列のツキ固め　2～3本の溝跡　ピット群
8	大畑・高清水中学校西	城跡内	溝跡　カマド跡　ピット
9	神屋敷・勅使館南沢部	南外郭線より500m	《竪穴住居跡9軒》竪穴状遺構　溝跡
10	鵜ノ木・運動場南	南東外郭線	《竪穴住居跡21軒》築地　溝状遺構　掘立柱建物跡　土坑
11	高　野	東外郭線より250m	検出遺構なし
12	児　桜	東外郭線より150m	《竪穴住居跡1軒》ピット群
13	大小路	南外郭線	《竪穴住居跡2軒》築地　溝状遺構　掘立柱列
14	焼　山	南西端外郭線	築地　溝状遺構　掘立柱建物跡　土坑
15	高　野	東外郭線より250m	《竪穴住居跡5軒》
16	将軍野南・幣切山	北外郭線	築地　溝状遺構　掘立柱建物跡
17	大小路	南外郭線内側	《竪穴住居跡42軒》掘立柱建物跡3棟　掘立柱列　溝跡
18	鵜ノ木	東外郭線より100m	《竪穴住居跡4軒》掘立柱建物跡12棟　井戸跡　溝跡　土坑
19	焼　山	西外郭線	築地　溝状遺構　掘立柱建物跡　暗渠排水溝
20A	焼　山	西外郭線より60m	検出遺構なし
20B	鵜ノ木・古四王神社北	南外郭線より120m	《竪穴住居跡3軒》溝状遺構　カマド跡
21	焼　山	北西外郭線内側	《竪穴住居跡11軒》掘立柱建物跡5棟　ピット群
22	鵜ノ木	東外郭線より100m	井戸跡　溝跡　土坑
23	大畑・幣切山東	東北外郭線	築地　溝状遺構　掘立柱建物跡　竪穴状遺構　土坑
24	大小路	南外郭線外側	《竪穴住居跡17軒》掘立柱建物跡1棟　溝状遺構　土坑
25	鵜ノ木	東外郭線より100m	《竪穴・竪穴住居跡7軒》掘立柱建物跡6棟　井戸跡　土坑
26	鵜ノ木	東外郭線より100m	掘立柱建物跡5棟　井戸跡　溝跡　土坑　杭列　整地面
27	大畑・護国神社北	北外郭線内側	土坑　柱掘り方　Aトレンチで築地
28	大畑・護国神社本殿西	内城域	掘立柱建物跡　土坑　小ピット群
29	大小路	南外郭線	築地　溝状遺構
30	鵜ノ木	東外郭線より100m	《竪穴・竪穴住居跡7軒》掘立柱建物跡8棟　土坑　柱列
31	大畑・護国神社北	内城域	築地　溝状遺構
32	大畑・護国神社北	内城域	1トレンチ　築地　溝状遺構　掘立柱建物跡　柱列 2トレンチ　築地　竪穴状遺構　3トレンチ　カマド跡 4トレンチ　竪穴状遺構
33	大畑・護国神社広場	内城域	掘立柱建物跡　鍛治工房跡　柱列　溝跡　土坑
34	鵜ノ木	東外郭線より100m	竪穴状遺構　井戸跡　溝跡　土坑　ピット群　整地層
—	後城E地区	西外郭線より300m	《竪穴住居跡32軒》溝跡　土坑

表1　秋田城跡発掘調査地区検出遺構

明確にすることにおかれた。外郭線の構造は，創建時より築地であったと考えられ，築地崩壊後は，柱列を伴う溝状遺構を設けたことが確認された。規模は，護国神社を中心に東西・南北550m である。

昭和47年以来の調査で検出された遺構は，一覧できるように別表1に示したが，外郭線に沿った地区と，さらに外郭線から離れた地区からも多数の竪穴住居跡が検出されていることが注目される。この稿では，昭和47年以来出されている秋田城跡発掘調査事務所の発掘調査報告をもとに，外郭線の内と外で竪穴住居跡が検出された地区を分け、それぞれの地区ごとに竪穴住居跡の遺構・遺物・配置などの面で特徴をとられた。これにより城内の竪穴住居跡の性格・機能，城外の集落との関連を探る上での基礎資料にしたいと考えた次第である。

なお，住居跡の他，遺構の集成・説明には，秋田城跡で用いている遺構番号をそのまま使用した。

Ⅱ　外郭線内側検出の竪穴住居跡

外郭線内側では，外郭線に沿って第10次の高清水小学校グランド南方・第13次・第17次の大小路，第21次の焼山の各調査地区で竪穴住居跡が検出されている。

東から西へ各地区の説明をしていく。

1．鵜ノ木第10次調査地区検出の竪穴住居跡

調査地区は，標高40ｍの台地の縁辺部にあたり，南側は急斜面となっている。崖下面との比高は，８ｍ程である。

台地の縁に沿って築地が検出され，外郭線の東南隈にあたることが確認された。築地は，地山飛砂層に黄褐色粘土を積み上げて構築しており，築地積土上面は，同方向を走る溝状遺構により切られており，その上をまたぐように２間×１間の掘立柱建物跡が検出されている。

秋田城内に入る西側で20軒の竪穴住居跡が検出され，いずれも地山飛砂層を掘り込んでいる。全体の四分の一がカマドだけの検出であるが，竪穴住居跡は，方形を呈し，数軒を除いて一辺が3.5ｍ以下の小さなものである。内部より柱穴・周溝は検出されなかった。

カマドの設けられた位置で竪穴住居跡を分類すると以下のようになる。

東壁側　第１号・第２号・第５号・第６号・第７号・第９号・第10号・第11ａ号・第11ｃ号・第13号・第18号・第19号・第20号

南壁側　第３号・第11ｂ号・第16号・第17号

北壁側　第８号・第12号

東壁側にカマドをもつものが大部分である。さらに《第１号・第２号・第５号・第６号・第７号・第10号・第13号・第20号》の掘り込みは，築地と平行な方位をもつ。Ａ群：〈第１号・第２号・第11ｃ号〉はカマドの補強に瓦を使用しており，Ｂ群：〈第13号・第19号・第20号〉のカマド位置が東南隈にあるという共通性を見い出し得る。

竪穴住居跡内からの出土遺物は，きわめて少なく時期的な比較はむずかしい。ただし，第13号床面から丸底の内黒土師器杯が，第12号床面から回転糸切り無調整の赤褐色土器杯が出土しており，前者を最も古い時期に，後者を最も新しい時期に比定できる。調査区内の出土遺物として鉄製品および砥石が多い。鉄製品は，鉄鏃53点・鉄鎌５点・鉄斧３点・金鉗１点・刀子８点となっており，砥石は28個出土し，孔を穿った５～10㎝の小形携帯用のものが22個と大部分である。第１号住居跡で鉄鎌２点，第５号住居跡で鉄鎌が１点，鉄斧１点が床面から出土している。

2．大小路第17次調査地区検出の竪穴住居跡

調査地区は，海抜30～32ｍの南緩斜面にあり，２～３ｍの落差をもつ段状の畑地が南西に向かう谷間に続いていく。南外郭線の中央よりやや西に偏する地区であり，築地および溝状遺構の検出された第13次調査地区の東延長線上になり，南西で接する第24次調査地区の北側で溝状遺構が検出されたことから外郭線の内側と考えられている。

650 ㎡の調査地区内より42軒の住居跡および掘立柱建物跡３棟，掘立柱列，溝跡が検出された。なお表土より地山飛砂層までは2.5ｍの深さがある。ＳＢ242・ＳＢ243掘立柱建物跡は，調査地区西側で竪穴住居跡の検出された第６層より上面に確認された。ＳＢ242は南北棟３間×２間でＳＢ243より新しい。　ＳＢ244掘立柱建物跡は，調査地区の中央東寄りに検出された。ＳＩ230竪穴住居跡より古く，ＳＩ211より新しい。ＳＡ256掘立柱列は，直径70㎝～１ｍの円形の

掘り方が一列に東西につながっており，ＳＤ250溝跡およびＳＤ251溝跡も東西方向にのびているが，ＳＤ251は第５層で，ＳＤ250は第９層で確認された。

竪穴住居跡群は，第６層の灰青色土より第10層の地山飛砂層に達するまで重なり合って検出された。各層位ごとに確認された住居跡を記載すると以下のとおりである。

第６層を確認面とする竪穴住居跡
ＳＩ201・ＳＩ202・ＳＩ203・ＳＩ204・ＳＩ205

第７層を確認面とする竪穴住居跡
ＳＩ206・ＳＩ207・ＳＩ208・ＳＩ209・ＳＩ210
ＳＩ211・ＳＩ220

第８層を確認面とする竪穴住居跡
ＳＩ212・ＳＩ213・ＳＩ214Ａ・ＳＩ214Ｂ
ＳＩ216・ＳＩ217・ＳＩ218・ＳＩ219

第９層を確認面とする竪穴住居跡
ＳＩ224・ＳＩ225・ＳＩ228・ＳＩ230・ＳＩ231
ＳＩ233・ＳＩ234・ＳＩ235

第10層の地山飛砂層を確認面とする竪穴住居跡
ＳＩ221・ＳＩ222・ＳＩ223・ＳＩ226・ＳＩ227
ＳＩ229・ＳＩ232・ＳＩ236・ＳＩ237・ＳＩ239
ＳＩ240

なお，いずれの竪穴住居跡からも柱穴・周溝等の内部施設は検出されなかった。

竪穴住居跡全体について概観すると，上位の第６・７層と下位の第８・９・10層とで大きく分かれる。上位では，住居跡の数が少なく，各住居跡の規模は大きい。下位では，住居跡の数が多く，各住居跡の規模は小さい。上位の住居跡のカマドは，南壁に設けられたものが多く，下位の住居跡のカマドは，東壁に設けられたものが多い。下位の東西壁にカマドを設けた住居跡は，東西に長く一定幅で検出されており，しかも第９層で確認されたＳＤ250溝跡の南側に位置している。

各層位における竪穴住居跡を規模・平面形・カマド位置等から共通する事項をひろいあげ，分類をこころみた。

Ａ群：〈ＳＩ204・ＳＩ205〉　第６層で確認され，調査地区のほぼ中央に位置している。南北に長い長方形を呈し，一辺が４～５ｍで比較的規模の大きいものである。カマドを南壁東寄りに設けている。第７層で確認されたＳＩ211も同様な特徴をもつ。ＳＩ204床面，ＳＩ205カマド付近より墨書土器が出土している。

Ｂ群：〈ＳＩ209・ＳＩ220〉　第７層で確認され，調査地区の北側に位置している。正確な規模・平面形・カマド位置は不明であるが，一辺が６ｍ以上でかなり規模の大きいものである。床面に焼土・炭化物が堆積しており，火災にあったものと考えられる。

Ｃ群：〈ＳＩ217・ＳＩ218・ＳＩ219〉　第８層で確認され，調査地区の西側に位置している。ＳＩ219の平面形は明確でないが，おおよそ方形を呈し，一辺が４ｍ前後の中規模のものである。カマドを東壁・東壁南寄りに設けている。

Ｄ群：〈ＳＩ225・ＳＩ230・ＳＩ235〉　第９層で確認され，調査地区の中央から東寄りに位置している。一辺が３ｍ以下で規模の小さいものである。カマドを東壁北寄りに設けており，ＳＩ225・ＳＩ235では，瓦をカマドの補強のために使用し，ＳＩ230でもカマド内に瓦片が遺存している。

以上により検出された竪穴住居跡42軒のうちのわずか11軒であるが，Ａ～Ｄの群としてとらえられる可能性をもっている。

竪穴住居跡内からの出土土器は，杯が比較的多い。第９・10層の住居跡内からは，回転ヘラ切りで切り離された須恵器杯。第８・７層の住居跡内からは，回転ヘラ切り離された須恵器杯と回転糸切りの切り離しで底辺部をヘラケズリ調整した赤褐色土器杯。第６層の住居跡内からは，回転糸切りの切り離しで無調整の赤褐色土器杯の出土が多いといえる。

調査地区内では，上層から下層にかけて256点におよぶ墨書土器が出土しており，竪穴住居跡の検出された第６層から第９層では，ほぼ同数の出土がある。ＳＩ201・ＳＩ204・ＳＩ205・ＳＩ209・ＳＩ211・ＳＩ214・ＳＩ218・ＳＩ219の住居跡内から出土しており，ＳＩ218住居跡の床面から「中」が３点，「中食」が１点出土していることが，注目される。

３．大小路第13次調査地区検出の竪穴住居跡

調査地区は，標高32～35ｍの南緩斜面である。

調査地区の西側で築地と考えられる粘土積土が検出され，南辺外郭線の一画であることが確認された。

築地は，地山飛砂層あるいは粘土混入の砂層上に版築している。築地の大部分が耕作による攪乱をうけ，

遺存状態は悪く，しかも，溝状遺構の掘り方で地山飛砂層まで切られている。溝の内側に築地崩壊以前の3個の柱穴が検出された。

竪穴住居跡が2軒，外郭線の内側に入る築地および溝状遺構のすぐ北側で検出されている。

第1号住居跡は，地山飛砂層を掘り込んでおり，第2号住居跡は，地山飛砂層の上層の赤褐色砂層を掘り込んでいる。第1号住居跡の規模は3.2m×2.9m，第2号住居跡も一辺が2.3mでいずれも小さく，カマドは東壁に設けている。第1号住居跡は，外郭線に近い場所にあり，掘り込みの方位は，外郭線に平行している。

第1号住居跡内のカマドおよび床面から丸底の内黒土師器杯，胴部内外にカキ目を施した土師器甕，静止系切りの切り離しで底部を手持ちヘラケズリ調整した須恵器杯が出土している。

4．焼山第21次調査地区検出の竪穴住居跡

調査地区は，標高45mの丘陵上にある。

築地および溝状遺構の検出された第19次調査地区から東に80mのところにある。第19次調査検出の外郭線北端が東側に曲る様子を示しており，第21次調査地区は，その延長線より南寄りに位置する。外郭線の検出はされなかったが，位置関係から外郭線の内側にあたると考えられる。

900㎡の調査地区内より11軒の竪穴住居跡と5棟の掘立柱建物跡とピット群が検出された。いずれも確認面は，表土下30～40cmの地山飛砂層である。5棟の掘立柱建物跡のそれぞれの規模は，ＳＢ314掘立柱建物跡が南北棟6間×2間，ＳＢ313掘立柱建物跡が総柱で東西棟5間×2間，ＳＢ316掘立柱建物跡が南北3間×東西1間以上，ＳＢ315掘立柱建物跡が南北棟2間×1間，ＳＢ318が東西2間×南北1間以上となっている。ＳＢ314がＳＢ313・ＳＢ316・ＳＢ315に，ＳＢ316がＳＢ313に切られるという重複関係があり，最も真北との振り幅が小さいＳＢ314が古く，ＳＢ316→ＳＢ313→ＳＢ315・ＳＢ318の順に新しくなる。ＳＢ315・ＳＢ318は掘り方が小さく，方向も同位であることから同時期で最も新しいと考えられる。ＳＢ313の北側掘り方内より回転ヘラ切りで切り離された台付須恵器杯が出土している。

竪穴住居跡は11軒検出され，ＳＩ003住居跡がＳＩ303の内側にある以外は重複関係がみられない。ただし上記掘立柱建物跡とは，ＳＩ303・ＳＩ308住居跡がＳＢ313建物跡を，ＳＩ307住居跡がＳＢ314を切るという重複関係がみられる。11軒の竪穴住居跡はいずれも掘り込みが明確であるが，規模・カマド位置・掘り込みの方位をみても共通性を見出し得ないが，Ａ群：〈ＳＩ305・ＳＩ307・ＳＩ311〉住居跡は，平面形が細長い長方形を呈し，特徴的である。ＳＩ305住居跡のカマドの補強に格子目瓦が使用されている。

ＳＩ303・ＳＩ306・ＳＩ307・ＳＩ308・ＳＩ309

◇　鵜ノ木第10次調査地区検出竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
第1号	地砂	10A	方形	東↔西	3.1m × 3.0m	9.3㎡	東壁南寄り	なし	なし	
第2号	地砂	10A	長方形	東↔西	2.5m × 2.0m	5.0㎡	東壁中央	なし	なし	
第3号	地砂		――	――	―― × ――	――	南向き	なし	なし	
第5号	地砂		楕円形	――	3.7m × 2.5m	9.3㎡	東向き	なし	なし	
第6号	地褐		――	――	3.8m × 3.7m	14.1㎡	東壁北隅	なし	なし	
第7号	地砂		方形	東↔西	3.8m × 4.3m	16.3㎡	東壁南寄り	なし	なし	
第8号	地砂		――	――	―― × ――	――	北向き	なし	なし	第7号△
第9号	地砂		――	――	―― × ――	――	東向き	なし	なし	
第10号	地砂		方形	――	3.2m × 3.5m	11.2㎡	東壁か？	なし	なし	
第11号	地砂		方形	――	4.9m × 4.2m	20.6㎡	東・南壁？	なし	なし	↑
第11号a	地砂		――	――	―― × ――	――	東向き	なし	なし	↑ 順に新
第11号b	地砂		――	――	―― × ――	――	南向き	なし	なし	↑

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
第11号c	地砂	10A	――	――	―― × ――	――	東向き	なし	なし	↑
第12号	地砂		方形	北西↔南東	2.5m × 2.2m	5.5㎡	北壁西隅	なし	なし	
第13号	地砂	10B	方形	東↔西	3.1m × 2.8m	8.7㎡	東壁北隅	なし	なし	
第14号	地砂		不整円形	――	2.4m × 2.2m	5.3㎡	なし	なし	なし	
第15号	地砂		――	――	―― × 2.5m	――	――	なし	なし	
第16号	地砂		――	――	―― × ――	――	南向き	なし	なし	
第17号	地砂		――	――	―― × ――	――	南向き	なし	なし	第7号△
第18号	地砂		隅丸長方形	南↔北	2.7m × 4.0m	10.8㎡	東壁北寄り	なし	なし	第13号△
第19号	地砂	10B	方形か？	――	―― × ――	――	東壁南隅	なし	なし	
第20号	地砂	10B	方形か？	――	―― × ――	――	東壁南隅	なし	なし	
第21号	地砂		――	――	―― × ――	――	――	なし	なし	

※地砂は地山飛砂層、赤砂は赤褐色砂層　　※△はより新しい意

◇ 大小路第17次調査地区検出竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
SI201	6層		方形	北西↔南東	3.4m × 3.1m	10.5㎡	東壁北隅	なし	なし	
SI202	6層		長方形	東↔西	5.6m × 3.8m	21.3㎡	――	なし	なし	
SI203	6層		――	――	―― × ――	――	――	―	―	
SI204	6層	17A	長方形	南↔北	3.7m × 4.2m	15.5㎡	南壁東寄り	なし	なし	
SI205	6層	17A	長方形	南↔北	4.0m × 5.7m	22.8㎡	南壁東寄り	なし	なし	
SI206	7層		――	――	―― × ――	――	――	―	―	
SI207	7層		方形	東↔西	3.3m × 2.7m	8.9㎡	西壁中央	なし	なし	SI231△
SI208	7層		方形	東↔西	3.3m × 2.8m	9.2㎡	南壁西寄り	なし	なし	SI209△
SI209	7層	17B	――	――	5.8m × ――	――	――	―	―	火災住居
SI210	7層		――	――	―― × ――	――	東壁北寄り	―	―	
SI211	7層		長方形	南↔北	5.2m × 4.0m	20.8㎡	南壁東隅	なし	なし	SI210△
SI212	8層		――	――	―― × 3.3m	――	東壁北寄り	―	―	
SI213	8層		――	――	―― × ――	――	――	―	―	
SI214A	8層		長方形	南↔北	3.2m × 4.3m	13.8㎡	なし	なし	なし	
SI214B	8層		長方形	南↔北	3.2m × 4.3m	13.8㎡	なし	なし	なし	
SI216	8層		――	――	―― × ――	――	――	―	―	SI217△
SI217	8層	17C	方形	東↔西	3.9m × 3.6m	14.0㎡	東壁南寄り	なし	なし	
SI218	8層	17C	――	東↔西	3.5m × ――	――	東壁南寄り	なし	なし	
SI219	8層	17C	――	――	―― × ――	――	東壁	―	―	
SI220	7層	17B	――	――	―― × ――	――	――	―	―	火災住居
SI221	10層		長方形	東↔西	4.6m × 3.3m	15.2㎡	西壁か？	なし	なし	
SI222	10層		方形	東↔西	3.3m × 3.0m	9.9㎡	西壁・北壁	なし	なし	SI221△

秋田城内外検出の竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m ×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
S I 223	10層		――	――	―― × ――	――	北壁	―	―	
S I 224	9層		方形	東 ↔ 西	3.6m × 3.1m	11.2㎡	南壁中央	なし	なし	
S I 225	9層	17D	長方形	南 ↔ 北	1.8m × 2.6m	4.7㎡	東壁中央	なし	なし	S I 224△
S I 226	10層		隅丸方形	東 ↔ 西	4.3m × 3.4m	14.6㎡	北壁東寄り	なし	なし	S I 227△
S I 227	10層		――	――	4.2m × 3.8m	16.0㎡	――	なし	なし	
S I 228	9層		方形	東 ↔ 西	3.1m × 2.9m	9.0㎡	東壁北寄り	なし	なし	
S I 230	9層	17D	方形	東 ↔ 西	2.3m × 2.7m	6.2㎡	東壁南隅	なし	なし	S I 231△
S I 231	9層		方形	――	2.8m × 2.4m	6.7㎡	――	なし	なし	
S I 232	10層		長方形	――	2.1m × 2.9m	6.1㎡	東壁北寄り	なし	なし	
S I 233	9層		方形	――	1.9m × 2.1m	4.0㎡	東壁北寄り	なし	なし	S I 234△
S I 234	9層		隅丸長方形	南 ↔ 北	2.8m × 4.3m	12.0㎡	南壁西隅	なし	なし	S I 232△
S I 235	9層	17D	――	――	―― × ――	――	東壁	―	―	S I 234△
S I 236	10層		――	――	―― × ――	――	――	―	―	S I 240△
S I 237	10層		――	――	―― × ――	――	――	―	―	
S I 238	10層		――	――	―― × ――	――	――	―	―	
S I 239	10層		――	――	―― × ――	――	西壁	―	―	S I 240△
S I 240	10層		――	――	―― × 3.6m	――	西壁	―	―	

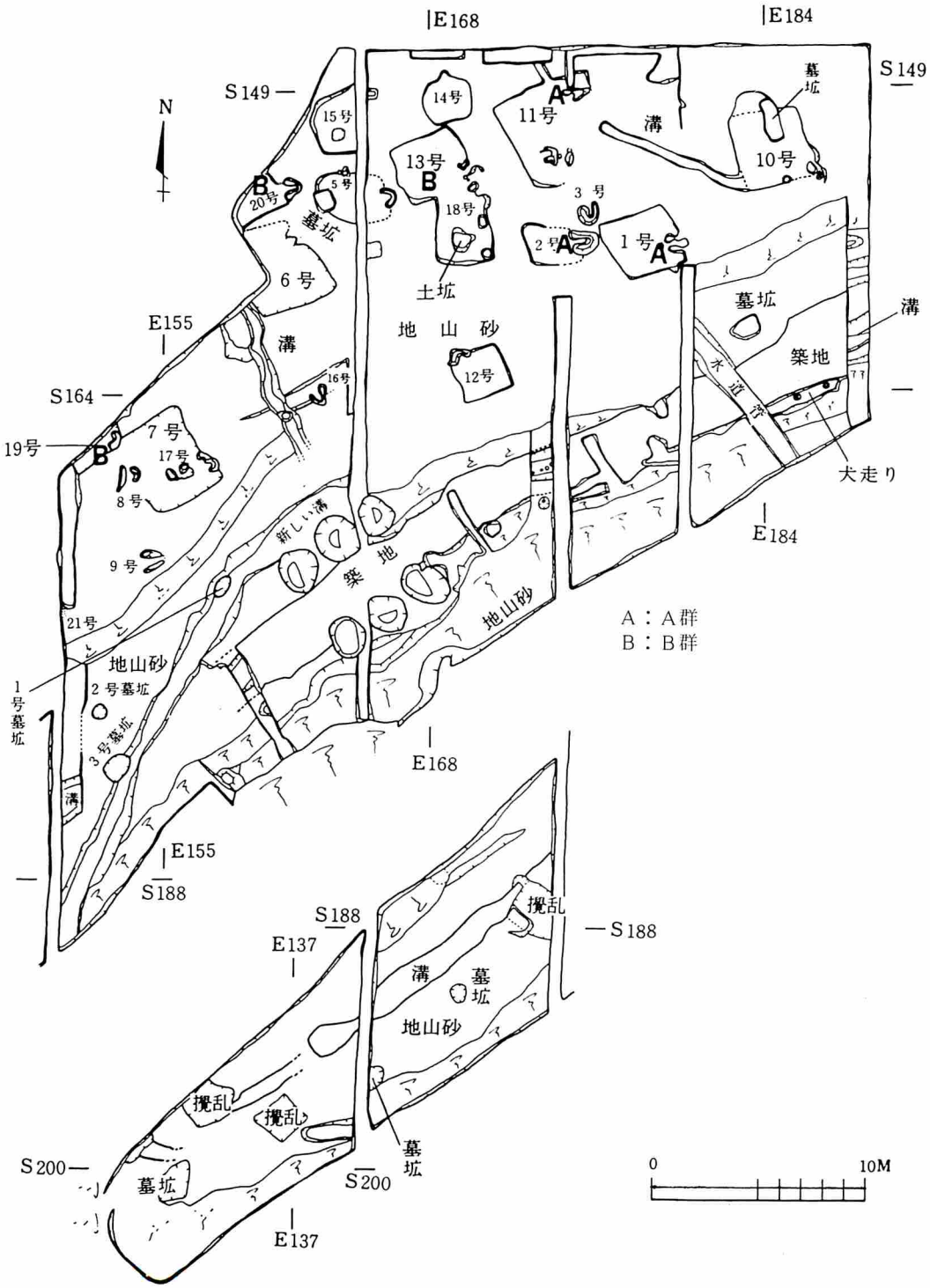
※△はより新しい意

◇ 大小路第13次調査地区検出竪穴住居跡

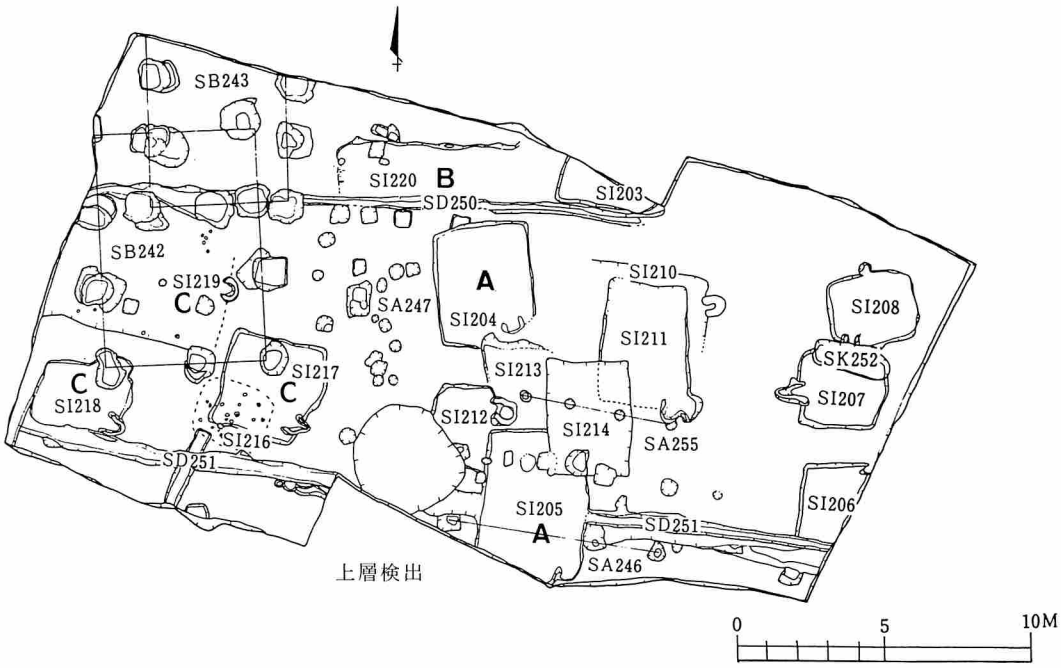
住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m ×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
第 1 号	地砂		方形	東 ↔ 西	3.2m × 2.9m	9.3㎡	東壁中央	なし	なし	
第 2 号	赤砂		――	――	2.3m × ――	――	東壁	なし	なし	

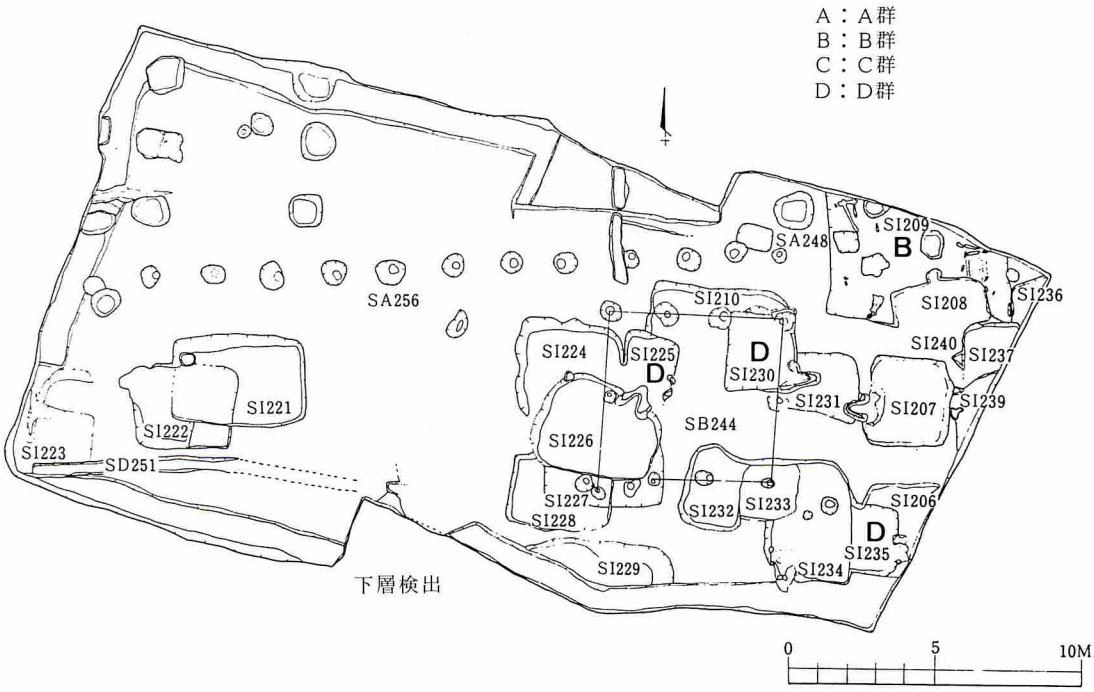
◇ 焼山第21次調査地区検出竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m ×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
S I 003	地砂		隅丸方形	東 ↔ 西	4.0m × 3.4m	13.6㎡	――	内4	なし	
S I 303	地砂		隅丸長方形	南 ↔ 北	6.9m × 8.2m	56.6㎡	東壁南寄り	なし	有	
S I 304	地砂		――	――	―― × 3.5m	――	――	隅6	なし	
S I 305	地砂	21A	隅丸長方形	南 ↔ 北	2.6m × 5.7m	14.8㎡	南壁西寄り	なし	なし	
S I 306	地砂		方形	南 ↔ 北	4.8m × 5.0m	24.0㎡	南壁西寄り	隅4	周巡	
S I 307	地砂	21A	隅丸長方形	東 ↔ 西	―― × 2.2m	――	北壁東隅	―	―	
S I 308	地砂		隅丸方形	東 ↔ 西	2.9m × 3.1m	9.0㎡	東壁北隅	なし	なし	
S I 309	地砂		長方形	南 ↔ 北	3.8m × 5.5m	20.9㎡	なし	なし	周巡	
S I 310	地砂		――	――	4.0m × ――	――	――	―	―	
S I 311	地砂	21A	隅丸長方形	東 ↔ 西	―― × 2.2m	――	――	なし	なし	
S I 312	地砂		――	――	―― × ――	――	――	―	―	

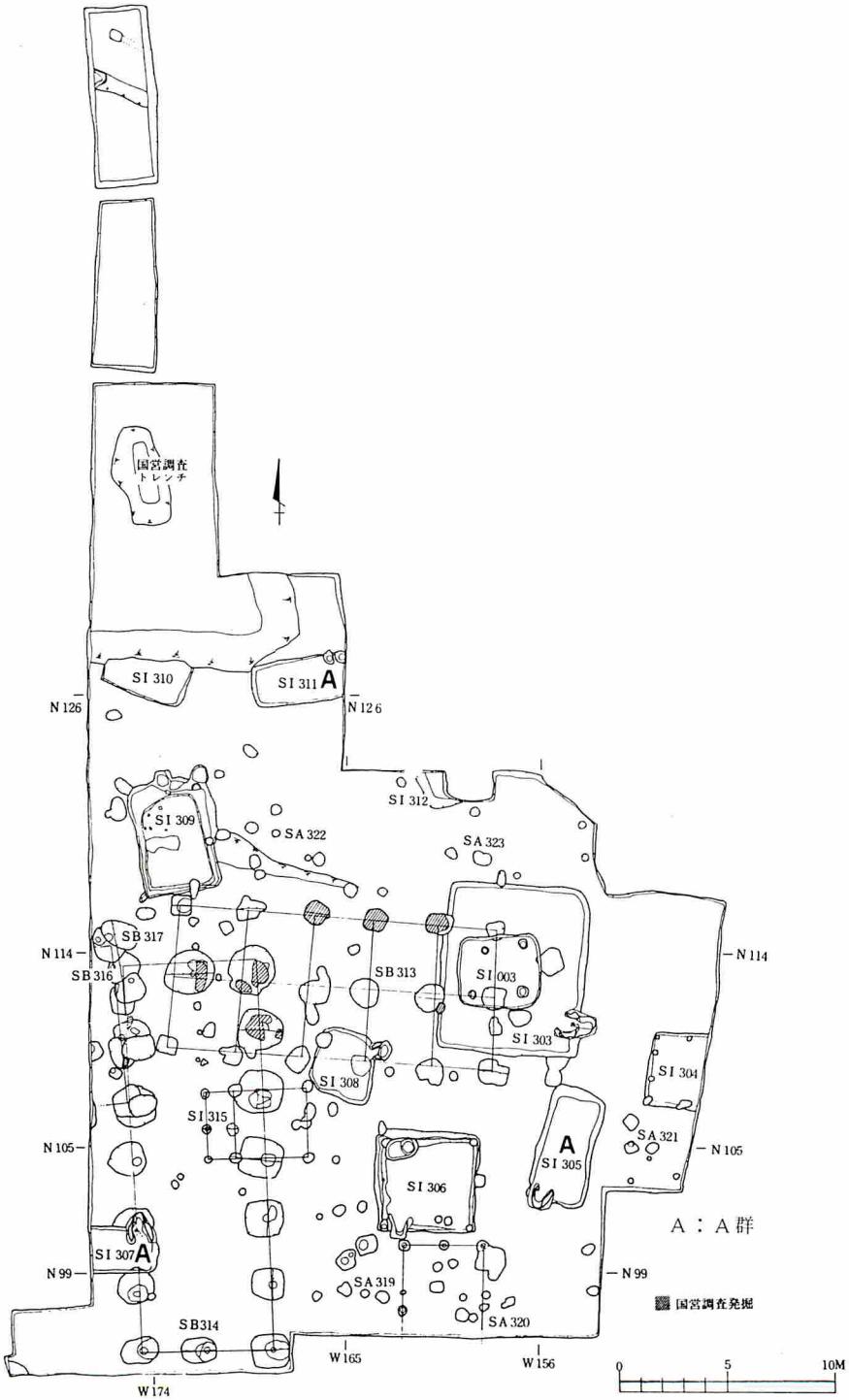


第２図　鵜ノ木第10次調査地区検出竪穴住居跡位置図





第3図　大小路第17次調査地区検出竪穴住居跡位置図



第４図　焼山第21次調査地区検出竪穴住居跡位置図

住居跡で回転ヘラ切りの切り離しの須恵器杯が出土している。なお規模が大きく，周溝をもつＳＩ303住居跡内からは，円面硯・刀装具の脛巾金が出土し，規模がやや大きく，周溝・柱穴をもつＳＩ306住居跡のカマドからは，和同開称・刀子が出土している。

Ⅲ　外郭線外側検出の竪穴住居跡

外郭線外側では，神屋敷の第９次，児桜の第12次，高野の第15次，鵜ノ木古四王神社北の第20次Ｂ，鵜ノ木の第18・25・30・34次，大小路の第24次，昭和53年の後城Ｅ地区と各調査地区で竪穴住居跡が検出された。

大小路，鵜ノ木，児桜，高野，神屋敷，後城と外郭線に近いところから順に説明して行く。

１．大小路第24次調査地区検出の竪穴住居跡

北東に走る沢に向かう南緩斜面にあたり，第17次調査地区とは北東で接する。地山飛砂層までは北側で30～50cmの深さであるが，南側に行くにしたがって厚くなり，50～80cmの深さがある。緩斜面を平坦にするため北側から南側へ削平されたものと考えられる。

640㎡の調査地区内より竪穴住居跡15軒，掘立柱建物跡１棟，溝状遺構，土坑・ピット群が検出されている。溝状遺構は２期あり，ＳＤ366Ａ溝状遺構が第６層で，ＳＤ366Ｂ溝状遺構が第７層で確認され，ＳＤ366ＢがＳＤ366Ａより古い。ＳＤ366Ａが幅２ｍ～3.4ｍ，深さ60cm，ＳＤ366Ｂが幅２ｍ，深さ80cmである。第13次調査地区で検出した外郭線の東延長線上にあり，築地が削平され，溝状遺構が遺存したと考えられる。ただし，第13次調査検出の溝状遺構とは，掘り方・幅にちがいがみられる。ＳＢ384掘立柱建物跡は，総柱で南北４間以上×東西２間以上の規模であり，第７層のＳＩ376・ＳＩ377・ＳＩ380竪穴住居跡埋土上面に小さな円形の掘り方が検出され，上記住居跡より新しい。

竪穴住居跡は，第７層黄褐色砂層でＳＩ367・ＳＩ368・ＳＩ369・ＳＩ370・ＳＩ371・ＳＩ372・ＳＩ383住居跡の７軒が検出され，ＳＩ367住居跡は，ＳＤ366Ｂ溝状遺構の上面に確認された。下層の地山飛砂層からは，ＳＩ373・ＳＩ374・ＳＩ375・ＳＩ376・ＳＩ377・ＳＩ378の８軒が検出された。いずれの竪穴住居跡からも周溝・柱穴等の内部施設は検出されなかった。カマドもわずか３軒に確認されただけであることから各層ごとの住居跡の分類はむずかしい。

確認面の上層・下層で竪穴住居跡にちがいがみられる。規模および平面形の上で，下層確認の住居跡は，一辺が３ｍ～５ｍの小さな方形を呈するものが多く，上層確認の住居跡は，一辺が５ｍ～７ｍの大きな長方形を呈するものが多い。さらに配置の上で，下層確認の住居跡は，外郭線と考えられる溝状遺構と空白地帯をおいて南側に検出されており，上層確認の住居跡は，北側から南側へ広く検出されている。また上層確認の住居跡は，ＳＩ369がＳＩ370を，ＳＩ371がＳＩ370を，ＳＩ371がＳＩ372を切るという北から南への重複関係が認められる。配置および重複関係から下層確認の住居跡は築地あるいは溝状遺構の外郭線が存在した時期にあって，占地上の規制が働いていたと考えられ，上層確認の住居跡は，ＳＩ367住居跡がＳＤ366Ｂの上に検出されており，外郭線のなくなっていた時期にあったものと考えられる。

竪穴住居跡内からは杯類の出土が多く，下層確認の住居跡からは，回転ヘラ切りで切り離された須恵器杯，上層確認の住居跡からは，回転糸切りで切り離された赤褐色土器杯の出土数が多い。また上層確認の住居跡内から土錘・砥石が多く出土している。

２．鵜ノ木第18次・第25次・第30次調査地区検出の竪穴住居跡

鵜ノ木地区は，秋田城跡東外郭線の東方約100ｍの位置にあり，周辺より一段高い微高地形を呈している。

昭和33年～37年の国営調査で四天王寺跡と推定されていたところであるが，第18・22・25・26・30・34次で8,791㎡におよぶ調査が行われ，多くの掘立柱建物跡・竪穴住居跡・井戸跡・柱列・土坑・溝跡が検出された。

南半高位に検出された掘立柱建物跡については，国営調査で四天王寺の第１・第２次講堂跡，第１・第２次金堂跡，経蔵跡，鐘楼跡と推定されていたものもあるが，再調査が行われ，規模・配置から新たな考察がなされている。以下建物跡については調査報告にもとづいて要約した。

建物の方位から大きく分類される。

Ⅰ群：建物の方位が真北に対して，３度～５度西に振

れをもつ〖ＳＢ006・ＳＢ395〗〖ＳＢ018・ＳＢ484〗〖ＳＢ485・ＳＢ019〗である。同一地点で建替があり，Ｉａ群：〔ＳＢ006・ＳＢ018・ＳＢ485〕の廂が付く時期が古く，Ｉｂ群：〔ＳＢ395・ＳＢ484・ＳＢ019〕の柱痕跡に焼土を含み，身舎だけになる時期が新しい。この他に建物の方位から〔ＳＢ397・ＳＢ398・ＳＢ429〕が古い時期のＩａ群に，さらに〔ＳＢ399・ＳＢ396〕が柱痕跡に焼土を含むことから新しい時期のＩｂ群に付属する建物であると考えられている。Ｉ群の建物跡については，『ＳＥ406井戸跡は，古い時期のＳＢ006と同時期と考えられ，井戸の廃棄年代は，もっとも新しい資料をもって決めると，紀年のある木簡では，天平勝宝５年頃，８Ｃ中頃となろう。井戸と共に機能したＳＢ006建物跡を中心とする古い時期の建物もこの年代に建替られ，ＳＢ395を中心とする新しい建物に変遷したものと考えられる』という年代観を報じている[1]。

Ⅱ群：走向方位が真北・真西に対して約10度の振れをもつ板塀状の区画施設と考えられるＳＡ501・ＳＡ502に建物の方位が近い〔ＳＢ487〕である。

Ⅲ類：走向方位が真北・真西に対して13度～15度の振れをもつ板塀状の区画施設と考えられるＳＡ500・ＳＡ407に建物の方位が近い〔ＳＢ488・ＳＢ262・ＳＢ263〕である。

重複関係からⅡ・Ⅲ群は，Ⅰ群より新しい。なお天平六年および天平勝宝五年の紀年銘を書いた木簡が出土したＳＥ406井戸跡からは，最下層で丸底土師器杯と回転ヘラ切りで切り離された須恵器杯が出土している。ＳＢ487建物跡の掘り方内からは，回転ヘラ切りで切り離された須恵器杯が，北西隈の抜き取り穴から赤褐色土器片が出土している。

南半高位の建物群に対して北側からは，掘り方の小さなＳＢ268・ＳＢ266・ＳＢ267・ＳＢ427・ＳＢ428建物跡が検出された。湿地ＳＧ463の周辺整地層上に確認され，集中して検出された井戸跡とともに平安時代後半以降に比定される。

竪穴住居跡は南半の高位で10軒検出された。いずれも黄褐色火山灰層を掘り込んでいる。

カマドを設けた住居跡は，《ＳＩ001・ＳＩ002・ＳＩ402ＡＢＣ・ＳＩ005・ＳＩ403・ＳＩ493・ＳＩ494ＡＢ》であり，ＳＡ407柱列の間に集っている。《ＳＩ402ＡＢＣ・ＳＩ493とＳＩ494ＡＢ》が３期の重複関係をもつ。Ａ群：〈ＳＩ402Ｂ・ＳＩ403・ＳＩ493〉が南壁東寄りに，Ｂ群：〈ＳＩ005・ＳＩ402Ｃ〉が東壁北寄りにカマドを設けている。Ａ群：〈ＳＩ402・ＳＩ403・ＳＩ493〉の掘り込み方位は，真北より西に約10度振れている。カマドを持つ住居跡の大部分が，中規模で周溝および柱穴を設けている。

カマドを設けたものを竪穴住居跡として上記に分類したが，カマドは設けないが，形態から住居跡と類似する竪穴群がある。《ＳＩ400・ＳＩ401・ＳＩ495・ＳＩ497・ＳＩ020・ＳＩ496・ＳＩ498》である。ＳＩ020を除いて小規模であるが，周溝をめぐらし，四隅に柱穴を設けている。ＳＩ020・ＳＩ495竪穴で地床炉らしい痕跡，ＳＩ499竪穴で床面に焼土が確認されている。Ｃ群：〈ＳＩ400・ＳＩ401・ＳＩ495・ＳＩ497〉の掘り込み方位は，真北より西に約10度振れており，竪穴住居群とほぼ一致する。Ｄ群：〈ＳＩ020・ＳＩ496・ＳＩ498〉の掘り込み方位は，真北を向く。

竪穴住居跡内および竪穴内からの出土土器は杯が多い。ＳＩ403竪穴住居跡カマドからは，回転糸切りで切り離された台付内黒土師器杯と回転糸切りで切り離された赤褐色土器杯が出土しており，ＳＩ400竪穴からは，回転ヘラ切りで切り離された須恵器杯と回転糸切りで切り離された赤褐色土器杯が出土しており，ＳＩ497竪穴からは，回転糸切りで切り離された須恵器杯と回転糸切りで切り離された赤褐色土器杯が出土している。上記で出土している赤褐色土器杯の器形は，やや内弯気味に外傾し，高さのあるもので一致する。なおＳＩ495竪穴から乾漆様容器が出土している。

竪穴住居跡および竪穴と掘立柱建物跡との重複関係は，以下のとおりである。ＳＩ020竪穴がＳＢ018・ＳＢ484建物跡を，ＳＩ400・ＳＩ401竪穴がＳＢ396・ＳＢ397建物跡を切っており，ＳＩ493竪穴住居跡がＳＢ490建物跡に切られている。

竪穴住居跡および竪穴は，Ⅰ群とした掘立柱建物跡より新しく，板塀状の柱列にともなうⅡ・Ⅲ群の掘立柱建物跡とは，掘り込みの方位が一致するものがあることから同時期かそれより新しいと考えられる。

3．児桜第12次調査地区検出の竪穴住居跡

外郭線から南西に300ｍ程離れており，標高40ｍの台地で南側は崖となっている。調査地区南端で竪穴住居跡が一軒，地山の黄褐色火山灰層で検出されており，南側は崖のため削られている。東西で4.3ｍを測る。カマドは，北壁の東寄りに設けられており，煙道部の長さが1.1ｍある。周溝・柱穴は認められない。遺物は，埋土から回転ヘラ切りで切り離された須恵器杯，頸部に稜をもつ土師器甕などが出土している。

4．高野第15次調査地区検出の竪穴住居跡

外郭線より東方に500ｍ程離れており，標高40ｍの平坦な台地にある。

633㎡を調査し，竪穴住居跡が5軒検出された。ただし完掘されたのは1軒だけである。

第1号住居跡は，地山の黄褐色火山灰層で確認され，東南部を第2号に切られている。東西5.2ｍ×南北4.4ｍの長方形を呈する。壁に沿って周溝が巡り，小さな柱穴が短辺に3本長辺に5本ある。カマドは東壁北隈に設けられており，黄白色粘土で構築され，両袖を平瓦で補強している。カマド北側に灰捨て穴がある。住居跡床面より小形の土師器甕が3点出土している。

5．鵜ノ木古四王神社北側第20次Ｂ調査地区検出の竪穴住居跡

外郭線より東南方に150ｍ程離れており，標高30ｍの平坦地にある。

調査地区の東南部より3軒の竪穴住居跡が重複した状態で検出された。

ＳＩ300住居跡は，西側をＳＩ298・ＳＩ299住居跡に，ＳＩ299住居跡は，周壁全体をＳＩ298住居跡に切られている。ＳＩ298住居跡は，褐色砂層で検出された。南北5.5ｍを測る。壁直下に周溝がめぐり，四辺に沿って3本以上の柱穴が認められる。カマドは，東壁北寄りに設けられており，黄白色粘土で構築されている。丸瓦が両袖部の補強に，燃焼部で支脚に使用されている。煙道部が長く住居外に張り出しており，1.6ｍを測る。ＳＩ299住居跡は，南北4.2ｍ×東西4ｍの規模があり，北東隈にカマドが設けられていたと考えられる。ＳＩ300住居跡の床面は，地山飛砂層であり，北東隅に柱穴が認められた。

ＳＩ298住居跡カマド・床面からの出土土器は，回転ヘラ切りで切り離され，内面にミガキのある土師器杯，回転糸切りで切り離された須恵器杯，回転糸切りで切り離され，体部下端を手持ちケズリ調整された赤褐色土器小形壺がある。

6．神屋敷第9次調査地区検出の竪穴住居跡

調査地区は，東を頂点として西に大きく開く沢にあり，西側は高さ20ｍ程の崖となり，直下を臨海道路が通っている。史跡指定地外であるが，宅地造成に伴う緊急調査が実施された。

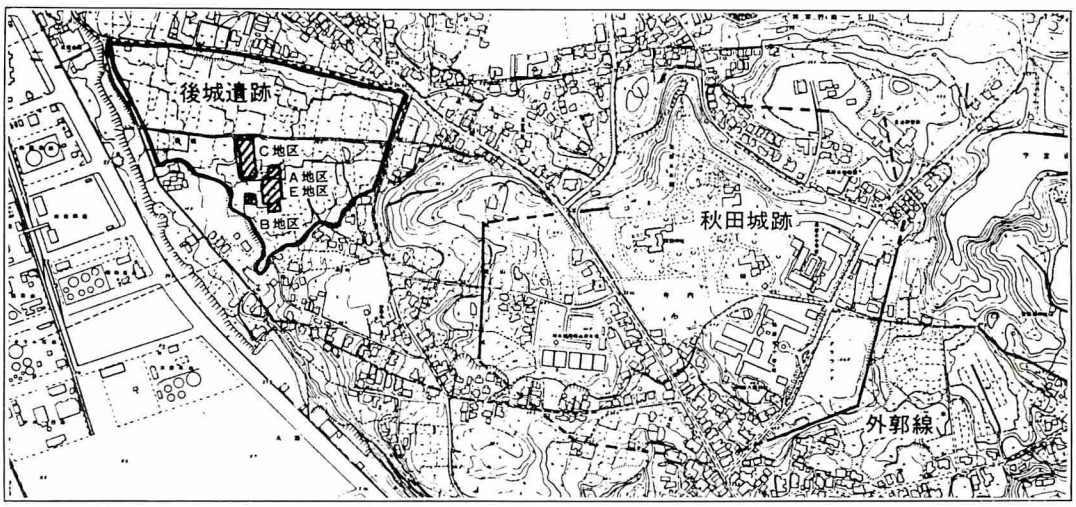
774㎡を調査し，竪穴住居跡9軒，竪穴状遺構，溝跡を検出している。

竪穴住居跡は，西北の平坦部で第1号～第5号の5軒，東沢部で第6号・第7号の2軒，南端台地で第8号・第9号の2軒が確認され，そのうちの7軒が完掘されている。それぞれの地点は，50ｍ以上の距離で離れているが，検出した各住居跡は，形態の上で類似している。西北平坦部の第5号住居跡と南端台地の第9号住居跡はいずれも中規模であり，壁直下に周溝がめぐり，四隈に柱穴をもち，カマド横に灰捨て穴を設けている。各住居跡内からの出土土器は，第3号住居跡を除いて回転ヘラ切りで切り離された須恵器杯が出土している。第5号住居跡の2ｍ西に検出された竪穴状遺構からは内面黒色処理された丸底土師器杯，回転ヘラ切りで切り離された須恵器杯，刀子，平瓦小片が一括して出土している。

地点別に住居跡をみると，西北平坦部では，第2号・第3号・第4号住居跡が接するように検出され，第2号住居跡が第3号・第4号住居跡に切られている。第1号・第4号・第5号住居跡のカマドを設けた位置にちがいがみられる。南端台地の第8号・第9号住居跡のカマドの設けられた位置は，同じである。なお第4号・第8号Ｃ・第9号住居跡のカマドには，平瓦あるいは丸瓦を使用し，補強している。

7．後城Ｅ調査地区検出の竪穴住居跡

調査地区は，高清水丘陵の北西部の裾野に位置し，標高20ｍの砂丘地上にある。秋田城の中心部から500ｍ，外郭線から300ｍ離れている。史跡指定地外であるが，宅地造成に伴う緊急調査が実施され，Ａ～Ｆ各



第5図　秋田城跡・後城遺跡位置図

調査地区で古代から近世にかけての遺構が検出された。

後城遺跡の中央東側寄りのE調査地区では，竪穴住居跡32軒，掘立柱建物跡1棟，溝状遺構，土坑が検出され，古代の集落遺跡であることが確認された。なおE調査地区の遺構は，飛砂層下3mの地山砂層で検出されている。SB192掘立柱建物跡は，南北2間×東西2間以上の総柱の建物跡であり，SI183竪穴住居跡と重複し，同住居跡より古い。SD193・SD195溝状遺構は，竪穴住居跡群を取り囲むような状態で検出され，幅が20cm～40cm，深さが20cm～30cmであり，ほぼ2mの間隔で柱穴が認められた。柵列の可能性が強いと考えられている。

32軒の竪穴住居跡は，方形を呈するものが多く，重複関係・規模・掘り込みの方位・カマドの付設位置により各群に分けられる。

A群：〈SI161・SI164・SI168・SI170・SI176〉　一辺が4～4.5mの中規模のもので南壁西寄りにカマドを設けている。SI161・SI164・SI176住居跡の壁直下に周溝が巡り，SI161・SI164住居跡では四隅に，SI176住居跡では四隅と一辺の中間に柱穴をもつ。

A′群：〈SI165・SI167・SI169〉　規模にちがいがみられるが，南壁西寄りにカマドを設けている。

B群：〈SI162・SI174・SI175・SI177・SI183・SI187〉　一辺が3m程の小規模なもので東壁北寄りにカマドを設けている。SI177住居跡のカマドは，SI176住居跡に切られたものであろう。SI183住居跡で周溝・柱穴が，SI187で柱穴が確認されている。SI187は火災にあったようであり，炭化材が遺存しており，北・西壁の壁板材が良好な状態で検出された。

A・A′・B群の竪穴住居跡については，SI177住居跡がSI176住居跡を，SI176住居跡がSI170住居跡を，SI170住居跡がSI165住居跡を，あるいはSI164住居跡がSI174住居跡を切るという重複関係があり，B群からA′群へ，A′群からA群へと変遷して行ったと考えられる。A′・A・B群の竪穴住居跡は，いずれも掘り込みが溝状遺構と同方位にあり，重複関係もみられないことから溝状遺構と同時期あるいはそれより新しいと考えられる。

C群：上記の群に入らないが，SD193・SD193溝状遺構内で溝状遺構と掘り込みが同方位をもつ竪穴住居跡がある。〈SI160・SI171・SI163〉住居跡であり，SI160住居跡は，SI167・SI168住居跡を切り，SI171住居跡は，SI162住居跡に切られるという重複関係をもつ。SI163住居跡は，壁直下に周溝がめぐり，四隅と一辺の中間に柱穴があり，形態的にSI176住居跡と類似する。

なお溝状遺構の内にある住居跡でSI161・SI167・SI173住居跡がカマド袖部を平瓦で補強している。

◇ 大小路第24次調査地区検出竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
SI367	7層		――	東↔西	――×5.0m	――	――	なし	なし	
SI368	7層		――	――	――×――	――	――	なし	なし	
SI369	7層		長方形	東↔西	5.3m×3.5m	18.6㎡	南東隅内側	なし	なし	SI370△
SI370	7層		長方形	南↔北	4.5m×7.4m	33.3㎡	南東隅焼土	なし	なし	
SI371	7層		方形	東↔西	8.0m×8.0m	64.0㎡	東壁北寄り	なし	なし	SI370△
SI372	7層		――	――	7.0m×――	――	――	なし	なし	SI371△
SI373	8層		――	――	5.4m×――	――	東・南壁？	なし	なし	SI371△
SI374	8層		方形	――	4.2m×4.0m	16.8㎡	東壁か？	なし	なし	SI382△
SI375	8層		方形	――	3.5m×3.5m	12.3㎡	――	なし	なし	SI374△
SI376	8層		――	――	――×――	――	――	なし	なし	SI379△
SI377	8層		方形	――	3.0m×3.4m	10.2㎡	――	なし	なし	
SI378	8層		長方形	東↔西	4.3m×3.0m	12.9㎡	――	なし	なし	
SI379	8層		方形	東↔西	3.0m×2.6m	7.8㎡	床面焼土	なし	なし	
SI380	8層		方形	南↔北	2.1m×2.6m	――	床面焼土	なし	なし	
SI381	8層		――	――	――×――	――	床面焼土	なし	なし	SI380△
SI382	8層		――	――	――×6.0m	――	――	なし	なし	
SI383	7層		長方形	東↔西	5.6m×4.6m	25.8㎡	――	なし	なし	

※△はより新しい意

◇ 鵜ノ木第18次調査地区検出竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
SI001	地黄		長方形	東↔西	4.0m×5.0m	20.0㎡	東壁南寄り	―	―	
SI002	地黄		――	――	――×――	――	――	―	―	
SI289	地黄		不整円形	――	3.0m×――	――	南側焼土	なし	なし	

※地黄は地山黄褐色火山灰層

◇ 鵜ノ木第25次調査地区検出竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
SI005	地黄	ウB	方形	東↔西	5.0m×4.5m	22.5㎡	東壁北寄り	隅6	有	
SI400	地黄	ウC	方形	南↔北	4.0m×4.1m	16.4㎡	なし	隅6	有	
SI401	地黄	ウC	長方形	東↔西	4.2m×3.1m	13.0㎡	南東側焼土	隅3	有	SI400△
SI402A	埋土		方形	東↔西	3.5m×3.5m	12.3㎡	東壁南寄り	なし	なし	
SI402B	埋土	ウA	方形	南↔北	3.8m×3.5m	13.3㎡	南壁東寄り	なし	なし	順に新
SI402C	地黄	ウB	方形	東↔西	3.8m×3.5m	13.3㎡	東壁北寄り	隅7	周巡	
SI403	地黄	ウA	方形	南↔北	4.5m×4.0m	18.0㎡	南壁東寄り	隅2	有	

※△はより新しい意

◇ 鵜ノ木第30次調査地区検出竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m ×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
S I 020	地黄	ウD	長方形	東 ↔ 西	5.7m × 3.8m	21.7㎡	地床炉か？	隅8	なし	
S I 493	地黄	ウA	――	――	―― × 3.5m	――	南壁東寄り	隅2	なし	順に新
S I 494A	地黄		方形	東 ↔ 西	3.2m × 3.0m	9.6㎡	西壁北寄り	隅6	なし	貯蔵穴
S I 494B	埋土		――	――	―― × ――	――	――	―	―	
S I 495	地黄	ウC	方形	東 ↔ 西	3.3m × 3.1m	10.2㎡	地床炉か？	なし	周巡	
S I 496	地黄	ウD	方形	東 ↔ 西	2.8m × 2.8m	7.8㎡	なし	なし	なし	
S I 497	地黄	ウC	方形	南 ↔ 北	2.6m × 2.7m	7.0㎡	なし	隅4	有	東側貯蔵穴
S I 498	地黄	ウD	長方形	東 ↔ 西	2.6m × 1.8m	4.7㎡	なし	隅5	なし	
S I 499	地黄		――	――	―― × 2.7m	――	南側焼土	なし	なし	

◇ 児桜第12次調査地区検出竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m ×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
第 1 号	地黄		方形	北西↔南東	4.3m × ――	――	北壁東隅	なし	なし	

◇ 高野第15次調査地区検出竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m ×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
第 1 号	地黄		長方形	東 ↔ 西	5.2m × 4.4m	22.9㎡	東壁北隅	隅9	周巡	灰捨穴有

◇ 鵜ノ木第20次B調査地区検出竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m ×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
S I 298	地砂		長方形	東 ↔ 西	―― × 5.5m	――	東壁北隅	隅6	有	
S I 299	地砂		方形	――	4.0m × 4.2m	16.8㎡	東壁北隅？	―	―	順に新
S I 300	地砂		――	――	―― × 4.9m	――	――	隅1	―	

◇ 神屋敷第9次調査地区検出竪穴住居跡

住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m ×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
第 1 号	地黄		――	――	―― × ――	――	北壁	―	―	
第 2 号	地黄		方形	南 ↔ 北	4.4m × 4.6m	20.2㎡	南壁か？	隅4	周巡	
第 3 号	地黄		――	――	3.7m × ――	――	――	―	有	第2号△
第 4 号	地黄		――	――	3.0m × ――	――	東壁北寄り	隅1	―	第2号△
第 5 号	地黄		長方形	南 ↔ 北	4.7m × 5.7m	26.8㎡	南壁東寄り	隅4	有	灰捨穴有
第 7 号	地黄		――	――	―― × ――	――	東壁か？	隅1	―	
第8号A	地黄		――	――	―― × ――	――	南壁中央	隅有	有	灰捨穴有
第8号B	地黄		――	――	―― × ――	――	東壁南寄り	隅有	―	順に新

秋田城内外検出の竪穴住居跡

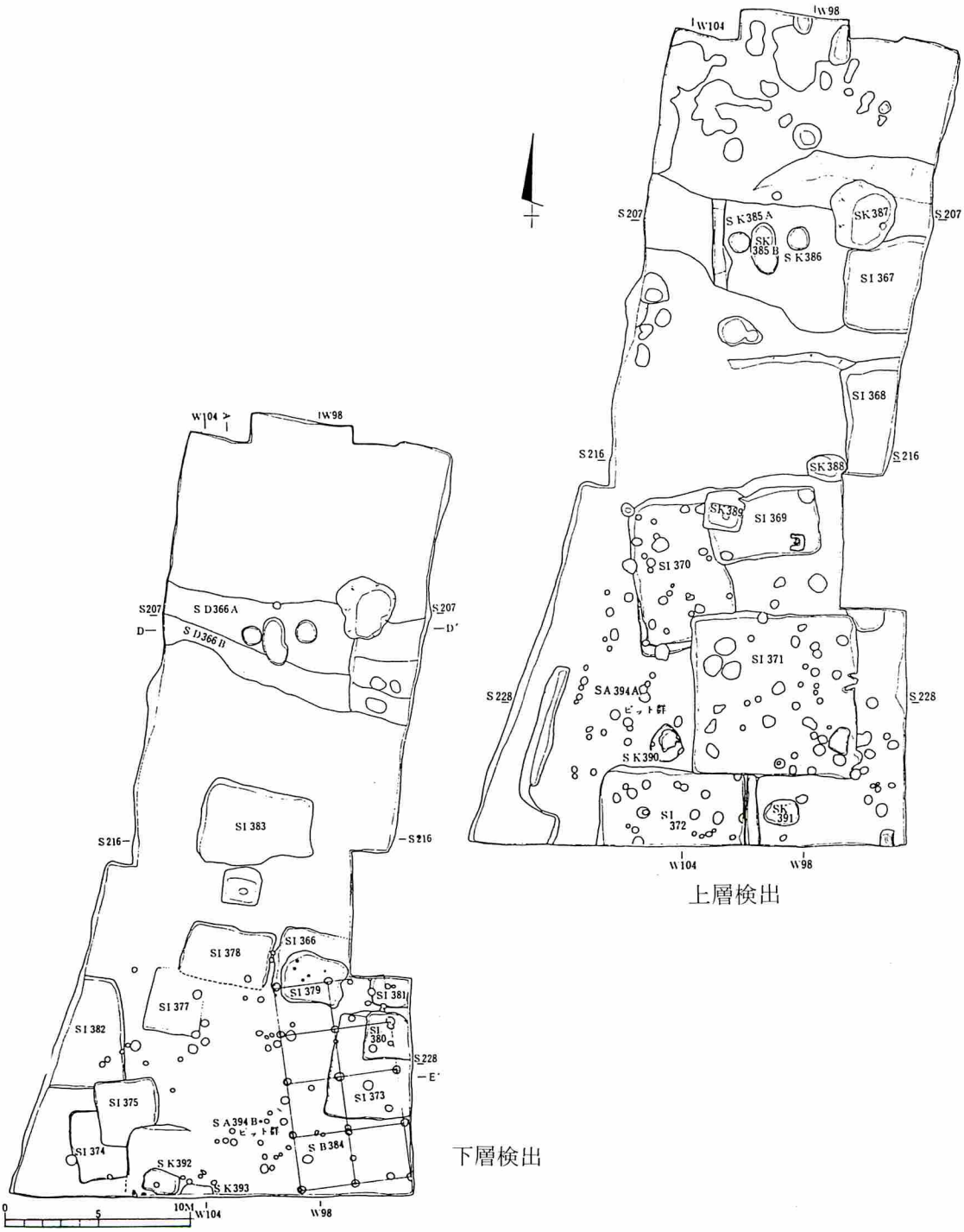
住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m ×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
第8号C	地黄		――	――	―― × ――	――	北向き	―	―	↑
第9号	地黄		方形	東↔西	5.9m × 5.3m	31.3㎡	東壁南隅	隅4	周巡	灰捨穴有

※△はより新しい意

◇ 後城E調査地区検出竪穴住居跡

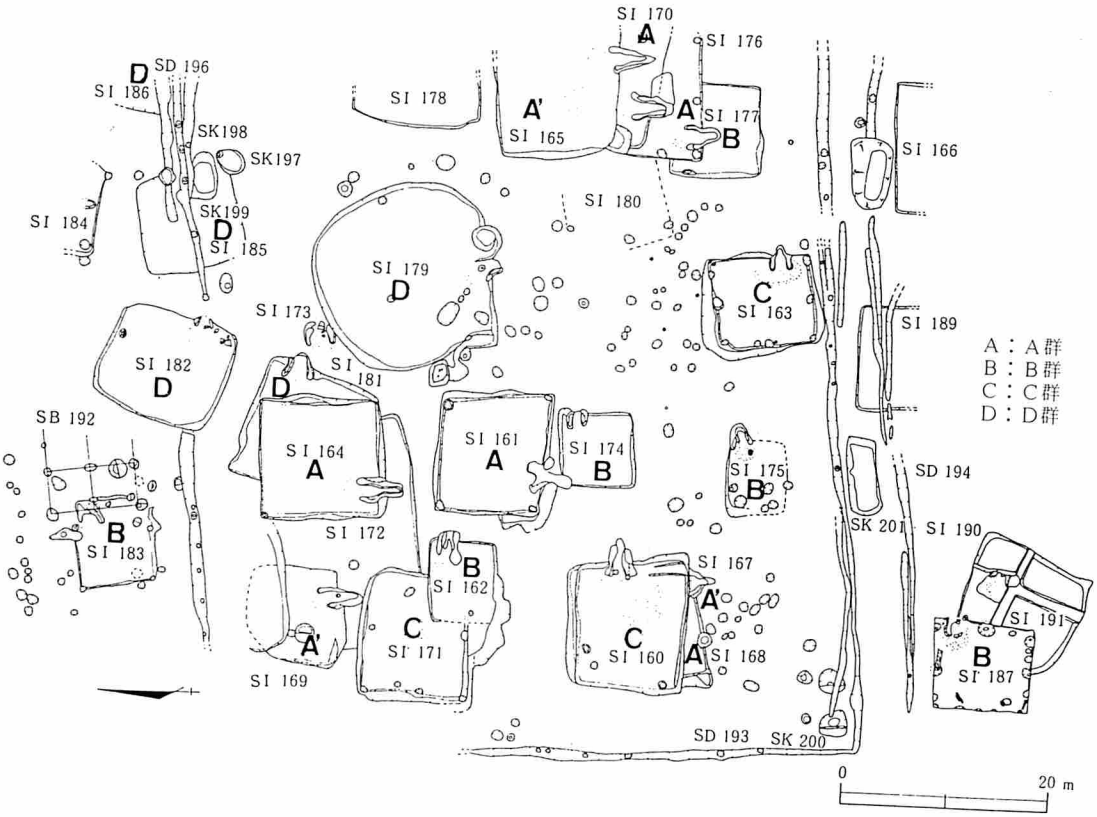
住居番号	確認面	形態分類	平面形	長軸方向	規模 東西m ×南北m	面積㎡	カマド位置	柱穴	周溝	備考
SI160	地砂	ジC	方形	東↔西	5.0m × 4.2m	21.0㎡	東壁中央	なし	有	SI167△
SI161	地砂	ジA	方形	南↔北	4.7m × 4.6m	21.6㎡	南壁西寄り	隅4	周巡	
SI162	地砂	ジB	方形	東↔西	3.3m × 3.1m	10.2㎡	東壁北寄り	なし	―	SI171△
SI163	地砂	ジC	方形	東↔西	4.1m × 4.6m	18.9㎡	東壁南寄り	隅7	周巡	
SI164	地砂	ジA	方形	南↔北	4.2m × 4.6m	19.3㎡	南壁西寄り	隅1	有	SI181△
SI165	地砂	ジA′	方形	南↔北	4.7m × 4.6m	21.6㎡	南壁東寄り	なし	なし	SI170△
SI166	地砂		――	――	5.0m × ――	――	――	―	―	SI176△
SI167	地砂	ジA′	方形	南↔北	5.1m × 5.2m	26.5㎡	南壁東寄り	―	―	
SI168	地砂	ジA	――	――	―― × ――	――	南壁	―	―	
SI169	地砂	ジA′	――	南↔北	3.8m × ――	――	南壁東寄り	―	有	SI172△
SI170	地砂	ジA	――	――	―― × ――	――	南壁西寄り	―	―	SI176△
SI171	地砂	ジC	長方形	東↔西	5.1m × 4.4m	22.4㎡	東壁か？	隅3	有	SI172△
SI172	地砂		――	――	8.5m × ――	――	――	―	―	
SI173	地砂		――	――	―― × ――	――	東向き	―	―	SI179△
SI174	地砂	ジB	方形	東↔西	3.0m × 2.9m	8.7㎡	東壁北寄り	なし	なし	SI181△
SI175	地砂	ジB	方形	東↔西	3.0m × 3.1m	9.3㎡	東壁北隅	なし	なし	
SI176	地砂	ジA	長方形	東↔西	4.8m × 3.3m	15.8㎡	南壁西寄り	隅8	有	SI177△
SI177	地砂	ジB	方形	――	3.6m × 3.5m	12.6㎡	東壁か？	―	―	
SI178	地砂		――	――	―― × 5.3m	――	――	―	―	
SI179	地砂	ジD	不整円形	南東↔北西	7.2m × 6.8m	22.0㎡	南壁中央	なし	なし	
SI180	地砂		――	――	―― × ――	――	――	―	―	
SI181	地砂	ジD	方形	東↔西	4.6m × 4.4m	20.4㎡	東壁北寄り	なし	なし	
SI182	地砂	ジD	隅丸長方形	南↔北	4.1m × 4.8m	19.7㎡	東壁南寄り	なし	なし	
SI183	地砂	ジB	方形	東↔西	3.4m × 3.1m	10.5㎡	東壁北寄り	隅4	有	
SI184	地砂		――	――	3.5m × ――	――	――	―	―	
SI185	地砂	ジD	隅丸方形	――	3.6m × 3.9m	14.0㎡	なし	なし	なし	
SI186	地砂	ジD	――	――	―― × ――	――	――	―	―	
SI187	地砂	ジB	方形	東↔西	3.5m × 3.7m	13.0㎡	東壁北寄り	隅14	なし	SI191△
SI188	地砂		――	――	2.7m × ――	――	――	隅1	―	火災住居
SI189	地砂		――	――	4.2m × ――	――	――	―	―	
SI190	地砂		――	――	―― × ――	――	東向きか？	―	―	
SI191	地砂		――	――	―― × 4.7m	――	――	―	―	

※△はより新しい意

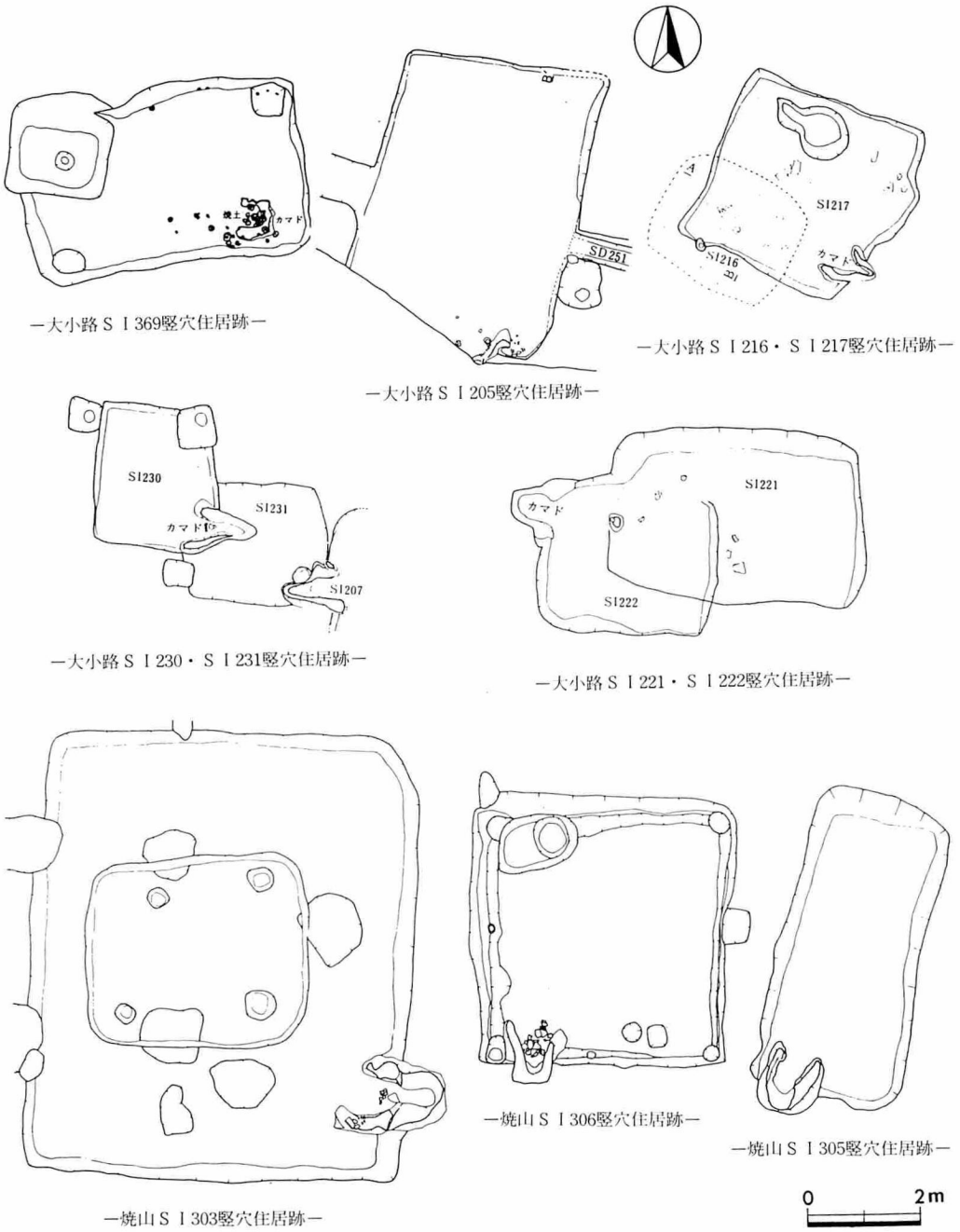


第6図　大小路第24次調査地区検出竪穴住居跡位置図

第７図　鵜ノ木調査地区検出竪穴住居跡・竪穴位置図



第8図　後城E調査地区検出竪穴住居跡位置図



ー大小路ＳＩ369竪穴住居跡ー

ー大小路ＳＩ205竪穴住居跡ー

ー大小路ＳＩ216・ＳＩ217竪穴住居跡ー

ー大小路ＳＩ230・ＳＩ231竪穴住居跡ー

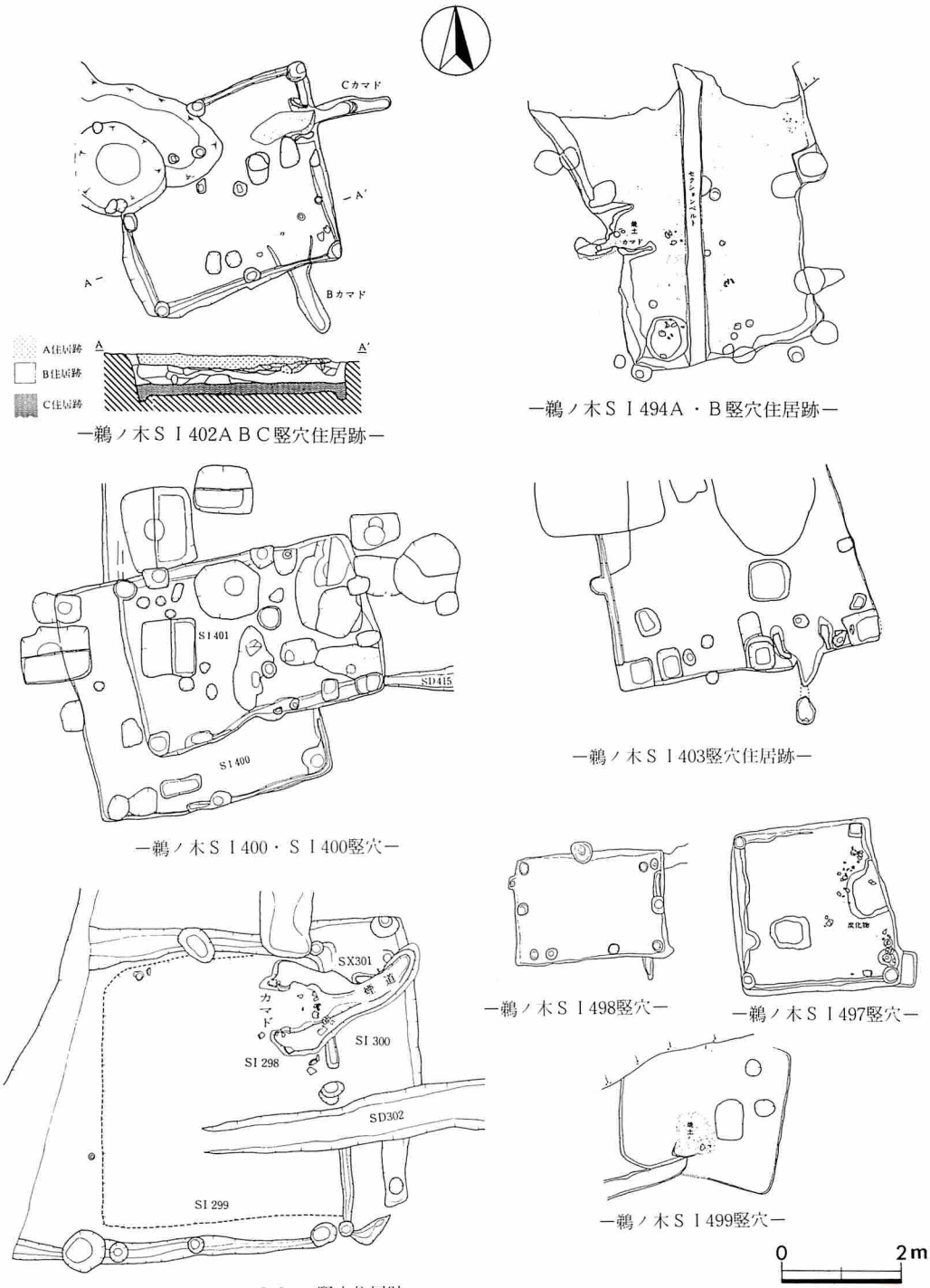
ー大小路ＳＩ221・ＳＩ222竪穴住居跡ー

ー焼山ＳＩ306竪穴住居跡ー

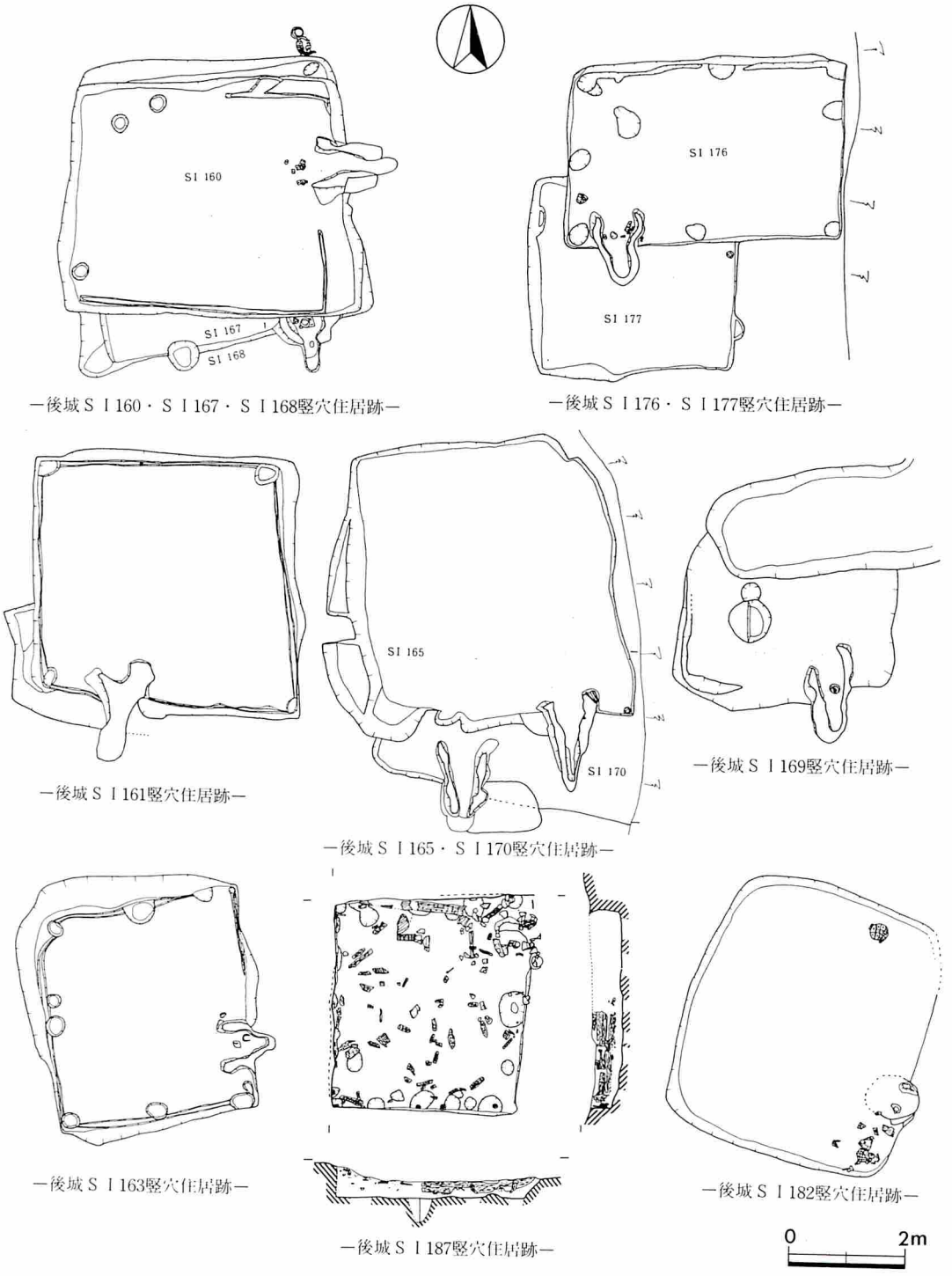
ー焼山ＳＩ305竪穴住居跡ー

ー焼山ＳＩ303竪穴住居跡ー

第９図　大小路・焼山調査地区竪穴住居跡集成図



第10図　鵜ノ木調査地区竪穴・竪穴住居跡集成図



—後城ＳＩ160・ＳＩ167・ＳＩ168竪穴住居跡—

—後城ＳＩ176・ＳＩ177竪穴住居跡—

—後城ＳＩ161竪穴住居跡—

—後城ＳＩ165・ＳＩ170竪穴住居跡—

—後城ＳＩ169竪穴住居跡—

—後城ＳＩ163竪穴住居跡—

—後城ＳＩ187竪穴住居跡—

—後城ＳＩ182竪穴住居跡—

第11図　後城Ｅ調査地区竪穴住居跡集成図

D群：この他北西側で〈ＳＩ182・ＳＩ185・ＳＩ186〉住居跡のように溝状遺構に切られている住居跡がある。掘り込みの方位が溝状遺構とずれており，〈ＳＩ179・ＳＩ181〉を含めて，B・A・A′群・溝状遺構より古い住居跡群と考えられる。

出土遺物は，D群とした古い時期の住居跡であるＳＩ179・ＳＩ182住居跡内から土師器杯・土師器甕・土師器高杯等が一括して出土しており，各住居跡内からは，回転ヘラ切りで切り離された須恵器杯，長胴の土師器甕の出土が多い。

Ⅲ　竪穴住居跡内出土土器とその年代

竪穴住居跡の年代については，これまでふれてこなかったが，出土土器の検討を通してその考察を行いたい。ただし，年代について明確な限定はできず，層位等から相対的に推測したにすぎないことを言及しておく。

1．大小路第17次・第24次調査地区検出の竪穴住居跡内出土土器とその年代

第17次調査地区検出の竪穴住居跡は，第６層から第10層の地山飛砂層に至るまで層位ごとに確認され，しかも，南西に隣接する第24次調査地区では，第17次調査地区の第５層に対応する層（第７層）から竪穴住居跡が確認されており，南辺外郭線の内側・外側で都合６層におよぶ竪穴住居跡の変遷がみられる。各住居跡内出土土器は，杯形土器が多い。

杯形土器については，調査報告を通じて，焼成のちがい・切り離し・調整により次のように分類されている。ここでは，記号を付して分類の基準を明確化した。

Ⅰ：土師器　黄褐色を呈し，内面がヘラミガキ調整されている。

Ⅰａ・成形にロクロは使用されず，外面を手持ちヘラケズリ調整し，内面および外面の一部をヘラミガキ調整し，黒色処理している。体部に段をもち丸底を呈するもの，体部がなめらかで丸底か平底を呈するものに分かれる。

Ⅰｂ・第20次Ｂ地区ＳＩ298住居跡から1点出土している。成形にロクロが使用され，回転ヘラ切りで切り離され，底部全体にナデを行い，丸底気味である。体部内外面にヘラミガキ調整痕がみられる。

Ⅰｃ・成形にロクロが使用され，回転糸切りで切り離され，底部に台を付したものが多い。内面あるいは外面口縁部にかけてヘラミガキで調整され，黒色処理されている。大形の椀状，小形の皿状のものに分かれる。

Ⅱ：須恵器　灰青色あるいは灰白色を呈し，登窯によって還元炎焼成されたものである。

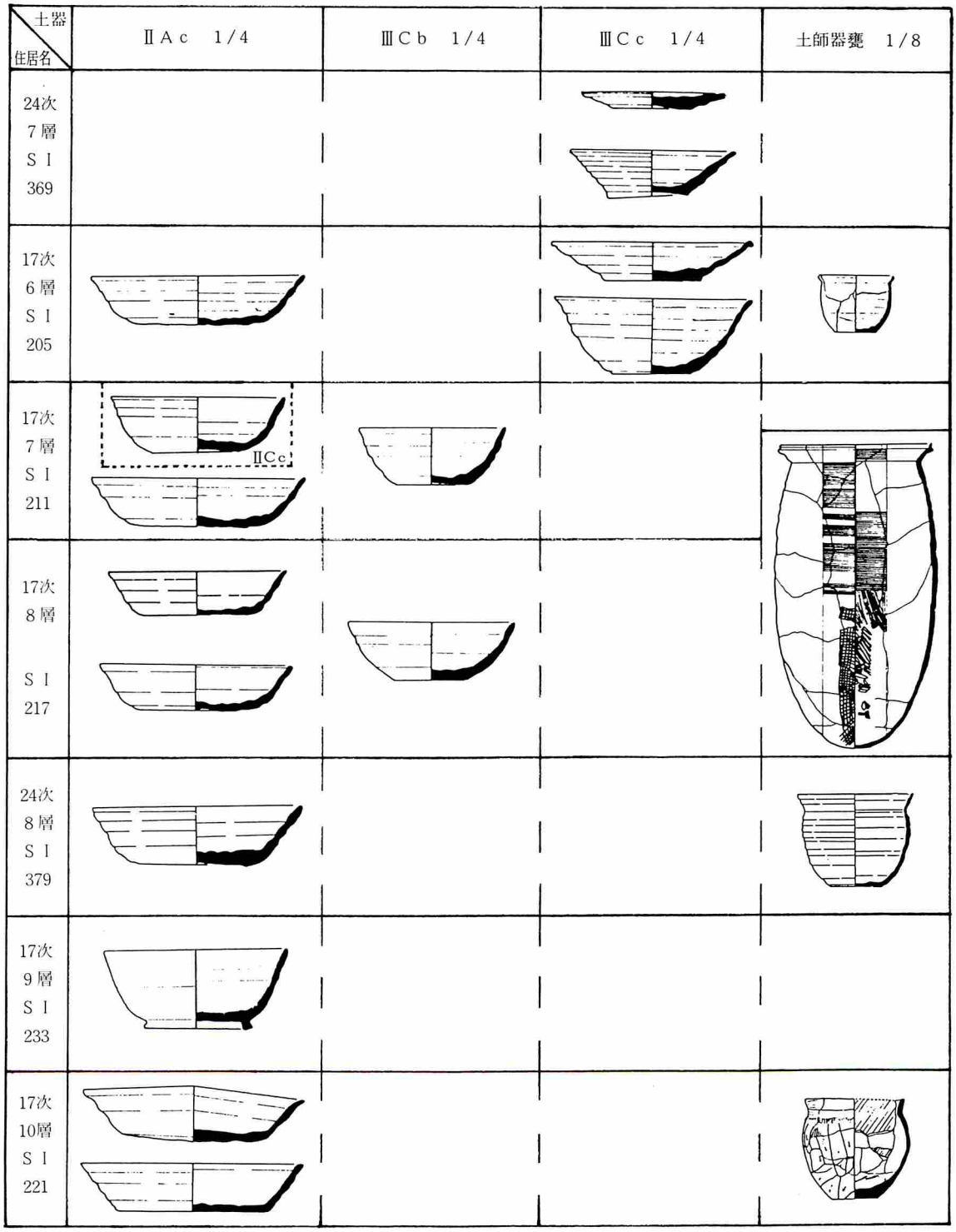
大きくは切り離し手法により分類される。Aは回転ヘラ切りにより，Bは静止糸切りにより，Cは回転糸切りにより切り離されたものである。それぞれの切り離し後，底部および底辺部にかけて調整が行われたものがあり，ａは手持ちヘラケズリ調整を，ｂは回転ヘラケズリ調整を示す。ｃは切り離し後，調整がされてないものである。回転ヘラ切りで切り離されたものは，底部が大きく，器高が低い。回転糸切りで切り離されたものは，底部が小さく，器高が高い。

Ⅲ：赤褐色土器　器形は須恵器に似ているが，明褐色・灰褐色・茶褐色を呈し，酸化炎焼成されたものである。

須恵器に順じて切り離し・調整を記号化した。切り離しはCの回転糸切りだけであり，調整はａ～ｃに分かれる。器高が高く，底部より内弯ぎみに立ち上がるもの，器高が低く，底部より外傾するものに分けられ，後者は皿状を呈する。

第17次・第24次調査地区内の竪穴住居跡内出土土器については，分類に基づいて別表のとおりまとめられた。

第17次調査地区内では，ⅡＡｃの須恵器杯が10層の地山飛砂層から第７層へ，ⅢＣｂおよびⅢＣｃの赤褐色土器杯が第８層から第６層へ連続して出土している。さらに上位にある第24次調査地区第７層および第17次調査地区第６層が確認面である住居跡内では，赤褐色土器杯のⅢＣｃが主に出土しており，須恵器杯はほとんどみられない。溝状遺構の上面に検出されたＳＩ367住居跡も上位にある。中位にある第17次調査地区第７・８・９層が確認面である住居跡内では，ⅡＡｃの須恵器杯とⅢＣｂあるいはⅢＣｃの赤褐色土器杯が共に出土している。共存関係においてⅢＣｂとⅡＡｃは，同数の割合で出土し，ⅢＣｃとⅡＡｃでは，ⅡＡｃが数の上で減少して行く傾向がみられる。下位にある第17次調査地区第10層の地山飛砂層が確認面である住居



第12図 大小路第17次・第24次調査地区竪穴住居跡内出土土器

跡では，ⅡＡｃの須恵器杯だけが出土している。

上記の杯形土器の変遷および共存関係をふまえた上で，さらにＳＩ367住居跡が層位的関連をもつ外郭線との相対関係から第17次・第24次調査地区検出の竪穴住居跡の年代考察を行いたい。

溝状遺構の前に外郭線を画していた築地は，秋田城の創建時に築造され，８Ｃ後半が築造年代と考えられている。築地の造営にかかわったと考えられる遺構は，第14次調査で外郭線の内側から多数検出された土取り穴がある。最も古い時期の土取り穴からは，Ｉａの土師器杯，ⅡＡａおよびⅡＡｃの須恵器杯，口縁部に４～６条の沈線をもつ土師器甕，土師器内黒蓋，砥石，紡錘車が出土している。また，第14次調査築地崩壊土下層（飛砂直上）からＩａの土師器杯，ⅡＡｃの須恵器杯，土師器甕が出土している。

Ｉａの土師器杯，ⅡＡａおよびⅡＡｃの須恵器杯，ロクロで成形されない土師器甕が組み合わさって８Ｃ後半に属する１群の土器と考えられる。下位とした住居跡内からは，やや丸底気味のⅡＡｃあるいはⅡＡｂの須恵器杯だけが出土し，ロクロ非使用の杯・甕は出土しておらず，９Ｃ前半頃に年代が推定できる。中位とした住居跡は，９Ｃ中頃から後半頃の年代が考えられる。秋田県仙北郡仙田柵跡の南門付近土坑内より嘉祥二年(849年）紀年の木簡と共に，明赤褐色を呈し，回転糸切りで切り離された後，底面から口縁部にかけてヘラケズリ調整された土師器杯，ロクロで成形された土師器甕，切り離しが回転ヘラ切りおよび糸切りで調整のない須恵器杯が出土しており[2]秋田城跡における赤褐色土器およびロクロ成形による土師器甕の出現を９Ｃ中頃に想定しておきたい。上位とした住居跡については，10Ｃ以降の年代が考えられる。ＳＩ205住居跡内より灰釉陶器台付皿と皿状を呈する赤褐色土器杯が出土している。Ａ群とした住居跡は10Ｃ前半頃，Ｂ群とした住居跡は９Ｃ後半頃，Ｃ群とした住居跡は９Ｃ中頃，Ｄ群とした住居跡は９Ｃ前半頃の年代が考えられる。

外郭線外側にあたる第24次調査地区第８層の地山飛砂層検出の竪穴住居跡については，ＳＩ379住居跡でⅡＡＣの須恵器杯とともにロクロ成形され，静止糸切りで切り離された土師器甕が出土しており，９Ｃ中頃の年代が考えられる。

２．外郭線内側第10次・第13次・第21次調査地区検出の竪穴住居跡内出土土器とその年代

第10次調査地区では，住居跡内出土土器がきわめて少ない。第20号住居跡でＩａの土師器杯，第13号住居跡でロクロ非使用の頸部に段をもつ土師器甕が出土しており，８Ｃ後半頃の年代が考えられる。第１号・第２号・第７号住居跡からは，ⅡＡｃの須恵器とロクロ非使用の土師器甕が出土しており，９Ｃ前半頃の年代が考えられる。第12号住居跡でⅢＣｃの赤褐色土器杯第11号Ａ住居跡でロクロで成形された土師器甕が出土しており，９Ｃ後半頃に年代が考えられる。Ａ群とした住居跡は８Ｃ後半頃，Ｂ群とした住居跡は９Ｃ前半頃の年代が考えられる。

第13次調査地区内の第1号，第2号住居跡は，ともに出土遺物が少ない。第１号住居跡では，ⅡＢａの須恵器杯とロクロ非使用の土師器甕片，第２号住居跡でもロクロ非使用の土師器甕が出土し，９Ｃ前半頃から中頃の年代が考えられる。

第21次調査地区の竪穴住居跡内からは，土師器杯・赤褐色土器杯は出土しておらず，ⅡＡｂあるいはⅡＡｃの須恵器杯が出土している。比較的台付の杯が多い。ＳＩ303・ＳＩ307・ＳＩ308住居跡は，９Ｃ前半頃に，ロクロで成形された土師器甕がカマド内から出土しているＳＩ 306住居跡については，９Ｃ中頃に年代が考えられるが，ともに出土している須恵器杯は器形のちがいがみられない。Ａ群としたＳＩ305・ＳＩ307・ＳＩ311の年代は，ＳＩ307の出土遺物より９Ｃ前半頃と推定される。

３．鵜ノ木地区の竪穴住居跡内出土土器とその年代

第20次Ｂ地区を含めて鵜ノ木地区内検出の竪穴住居跡内からは，杯形土器の出土が多く，住居形態も他の外郭線外側の竪穴住居跡とは異っているので，別に出土土器の検討，年代考察を行った。

カマドをもつＳＩ403住居跡からは，Ｉｃの土師器杯，ⅡＡｃの須恵器杯，ⅢＣｃの赤褐色土器が共に出土しており，９Ｃ後半頃の年代が考えられる。カマドをもつＳＩ402ＡＢＣ・ＳＩ493住居跡，カマドをもたないＳＩ493竪穴でも，ⅢＣｃの赤褐色土器杯とⅡＡｃの須恵器杯とＩｃの土師器杯とが共に出土し，同年代と考えられる。カマドをもたないＳＩ497・ＳＩ496・

Ⅰ：土　師　器　杯　　a′・整形にロクロ非使用。外面底部をヘラケズリ。内外面をヘラミガキ調整し、黒色処理している。丸底ないし平底。
b′・整形にロクロが使用され、回転ヘラ切りで切り離し後、底辺部を回転ヘラケズリ。体部内外面はヘラミガキ調整。
c′・整形にロクロが使用されている。回転糸切りで切り離し後、内面をヘラミガキ調整し、黒色処理している。

Ⅱ：須　恵　器　杯　　切り離しA・回転ヘラ切り　　a・手持ちヘラケズリ調整
b・回転ヘラケズリ調整
c・調整なし
切り離しB・静止糸切り　　a・手持ちヘラケズリ調整
b・回転ヘラケズリ調整
切り離しC・回転糸切り　　a・手持ちヘラケズリ調整
b・回転ヘラケズリ調整
c・調整なし

Ⅲ：赤褐色土器杯　　切り離しC・回転糸切り　　a・手持ちヘラケズリ調整
b・回転ヘラケズリ調整
c・調整なし

◇　大小路第17次調査地区　―竪穴住居跡内出土土器―

凡例 ●（■は台付）カマド・床面出土
○（□は台付）埋土内出土

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							Ⅲ赤褐色土器杯			その他の出土遺物
						A			B	C			C			
			a′	b′	c′	a	b	c		a	b	c	a	b	c	
S I 201	6層												●		● ○	須恵器大甕　○円筒土器
S I 202	6層														● ○	
S I 203	6層														○	
S I 204	6層	17A											○			ⅡAC片墨書「厨上」
S I 205	6層	17A						●							● ○	小形土師器甕　○灰釉陶器皿
S I 206	7層															
S I 207	7層							○								
S I 208	7層							○						●		
S I 211	7層							● ○				●		●		須恵器蓋
S I 210	7層															○須恵器蓋　○砥石　○鉄鏃
S I 209	7層	17B			○			○								○須恵器蓋
S I 220	7層	17B														
S I 212	8層							●							● ○	○小形土師器甕
S I 213	8層							○								○土師器甕
S I214A	8層							● ○						●	●	砥石　Ⅰb′片墨書「金？」
S I214B	8層							■ □						○		須恵器蓋墨書「秋田」
S I 216	8層													●	●	須恵器蓋　赤褐色土器蓋
S I 217	8層	17C						● □						●		土師器丸底長胴甕Ⅳ
S I 218	8層	17C						●						●	●	
S I 219	8層	17C						●						●○		

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							Ⅲ赤褐色土器杯			その他の出土遺物
			a′	b′	c′	A			B	C			C			
						a	b	c		a	b	c	a	b	c	
S I 225	9層	17D										■				
S I 230	9層	17D														
S I 235	9層	17D						○								
S I 233	9層							■ □								○砥石
S I 234	9層															○須恵器蓋
S I 231	9層															○砥石
S I 224	9層													●		
S I 228	9層							○							■ ←	静止糸切り
S I 222	10層															
S I 221	10層						●	●								小形土師器甕
S I 223	10層															土師器長胴甕Ⅱ
S I 226	10層															土師器甕
S I 227	10層															
S I 229	10層							● ○								
S I 232	10層							□								
S I 238	10層							○								
S I 236	10層															
S I 239	10層															
S I 240	10層															砥石
S I 237	10層															

◇ 外郭線築地・溝状遺構出土土器

調査地区・出土状況	建替数	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							Ⅲ赤褐色土器杯			その他の出土遺物
		a′	b′	c′	A			B	C			C			
					a	b	c	a	a	b	c	a	b	c	
焼山第14次築地崩壊土上層	Ⅰ期						●								砥石・鉄鏃
焼山第14次築地崩壊土下層	〃	●					●								土師器長胴甕Ⅱ・Ⅱ′ 砥石　鉄鏃
焼山第14次土取り穴内	〃	●			●		●								土師器長胴甕Ⅰ 砥石　紡錘車
焼山第14次溝状遺構内	Ⅰ期										●				刀子
焼山第19次築地崩壊土上層	Ⅱ期					●	●	●							土師器甕　埼　砥石 鉄鏃　羽口
焼山第19次築地崩壊土下層	〃	●			●										小形土師器甕　砥石 須恵器甕　鉄鏃
焼山第19次溝状遺構内	Ⅱ期													●	須恵器蓋
鵜ノ木第10次築地崩壊土	Ⅰ期			●			■								
大小路第24次溝状遺構A	Ⅱ期			●										●	
大小跡第24次溝状遺構B	Ⅱ期						●								

◇　大小路第24次調査地区　―竪穴住居跡内出土土器―

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							Ⅲ赤褐色土器杯			その他の出土遺物
			a′	b′	c′	A			B	C			C			
						a	b	c		a	b	c	a	b	c	
S I 367	7層				■?										●○□	羽口　○刀子　○鉄鏃
S I 368	7層														●	砥石
S I 369	7層														●○■	塼転用砥石　○格子目瓦片 赤褐色蓋墨書片　○土錘
S I 372	7層											○				刀子　○鉄鏃
S I 371	7層														○□	土錘　砥石　○鉄鏃 ○刀子　○瓦片
S I 370	7層							□							●○■	土錘　○鉄鏃　○鉄釘 ○Ⅰc′片・須恵器蓋片墨書
S I 383	7層														●○	小形土師器甕 土錘　砥石　刀子
S I 375	8層							●								
S I 374	8層							○								○刀子　○鉄鏃
S I 382	8層															
S I 376	8層															鉄鏃　砥石　ⅡＡｃ片墨書
S I 377	8層							○ □								鉄鏃
S I 378	8層							○								
S I 379	8層							●								小形土師器甕
S I 373	8層															
S I 381	8層															
S I 380	8層															

◇　鵜ノ木第10次調査地区　―竪穴住居跡内出土土器―

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							Ⅲ赤褐色土器杯			その他の出土遺物
			a′	b′	c′	A			B	C			C			
						a	b	c		a	b	c	a	b	c	
第 1 号	地砂	10A				○										須恵器蓋　○土師器甕 鉄鎌　○刀子
第 2 号	地砂	10A						●								
第 5 号	地砂															鉄鎌　鉄斧
第 6 号	赤砂															
第 7 号	地砂															○土師器甕
第 9 号	地砂															
第 10 号	地砂															
第 13 号	地砂	10B						○								土師器長胴甕Ⅰ　○鉄釘
第 18 号	地砂															
第 19 号	地砂	10B														
第 20 号	地砂	10B	●													

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							Ⅲ赤褐色土器杯			その他の出土遺物
			a′	b′	c′	A			B	C			C			
						a	b	c		a	b	c	a	b	c	
第 3 号	地砂															○刀子
第 16 号	地砂															
第 17 号	地砂															
第 8 号	地砂															
第 12 号	地砂														●	鉄製品　○鉄製品
第 11 号	地砂															刀子
第11号 a	地砂															土師器長胴甕Ⅳ
第11号 b	地砂															土師器長胴甕Ⅲ 小形土師器甕　須恵器高杯
第11号 c	地砂	10A														
第 14 号	地砂															
第 15 号	地砂															

◇　大小路第13次調査地区　―竪穴住居跡内出土土器―

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							Ⅲ赤褐色土器杯			その他の出土遺物
			a′	b′	c′	A			B	C			C			
						a	b	c	b	a	b	c	a	b	c	
第 1 号	地砂								●							
第 2 号	赤砂							○								土師器甕　土錘

◇　焼山第21次調査地区　―竪穴住居跡内出土土器―

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							Ⅲ赤褐色土器杯			その他の出土遺物
			a′	b′	c′	A			B	C			C			
						a	b	c		a	b	c	a	b	c	
S I 303	地砂						○	●○□								円面硯　脛巾金　○砥石 ○鉄鏃　○鉄釘
S I 306	地砂							●○								須恵器蓋　小形土師器甕 土師器長胴甕Ⅱ・Ⅳ 刀子　○砥石
S I 305	地砂	21A														格子目瓦片
S I 307	地砂	21A						○■								○土錘
S I 311	地砂	21A														
S I 308	地砂							●								
S I 309	地砂							○□								
S I 310	地砂						□									
S I 304	地砂															○須恵器蓋　○刀子
S I 312	地砂															

※地砂は地山飛砂層

◇　鵜ノ木第25次・第30次・第34次　―竪穴・竪穴住居跡内出土土器―

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							Ⅲ赤褐色土器杯			その他の出土遺物
			a′	b′	c′	A			B	C			C			
						a	b	c		a	b	c	a	b	c	
S I 403	地黄	ウA			■			●							●	小形土師器甕　土師器椀
S I402A	埋土							○							○	土師器鍋
S I402B	埋土	ウA														
S I402C	地黄	ウB						●								
S I 493	地黄	ウA			■										●	赤褐色土器甕
S I494A	地黄														●	
S I494B	地黄											○□				○須恵器鉢
S I 005	地黄	ウB														
S I 001	地黄															
S I 002	地黄															
S I 400	地黄	ウC														
S I 401	地黄	ウC														
S I 495	地黄	ウC						●　○							●○□	乾漆様容器
S I 497	地黄	ウC										●□			●□	
S I 020	地黄	ウD														
S I 496	地黄	ウD			○							○			○	軽石　○赤褐色土器甕
S I 498	地黄	ウD										○			○	○灰釉陶器
S I 499	地黄															
S I 289	地黄														●	土師器内黒蓋　円筒土器 ○須恵器小壺　鉄釘　鉄鏃

◇　鵜ノ木第20次Ｂ調査地区　―竪穴住居跡内出土土器―

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							Ⅲ赤褐色土器杯			その他の出土遺物
			a′	b′	c′	A			B	C			C			
						a	b	c		a	b	c	a	b	c	
S I 298	地砂			●								●　○			○　□	赤褐色土器壺　丸瓦 ○鉄斧　○刀子
S I 299	地砂															
S I 230	地砂															

ＳＩ498竪穴からは，ⅡＣｃの須恵器杯が出土しているが，共に出土しているⅢＣｃの赤褐色土器杯は，上記のⅡＡｃと共に出土しているものと器形上の差はなく，９Ｃ後半頃の年代が考えられる。

第20次Ｂ調査地区のＳＩ298住居跡からは，Ⅰ$\acute{b}$の土師器杯とⅡＣｃの須恵器杯とⅡＣｃの赤褐色土器杯が出土しており，９Ｃ中頃の年代が考えられる。

４．外郭線外側第15次・第９次・後城Ｅ調査地区竪穴住居跡内出土土器とその年代

外郭線から遠く離れた第15次・第９次・後城Ｅ調査地区からは，赤褐色土器杯の出土がみられない。そこで赤褐色土器杯に変えて土師器長胴甕の分類を土師器と須恵器杯の分類に加えた。

土師器長胴甕の分類は，後城Ｅ地区の調査報告で行われた分類にしたがった[3)]。

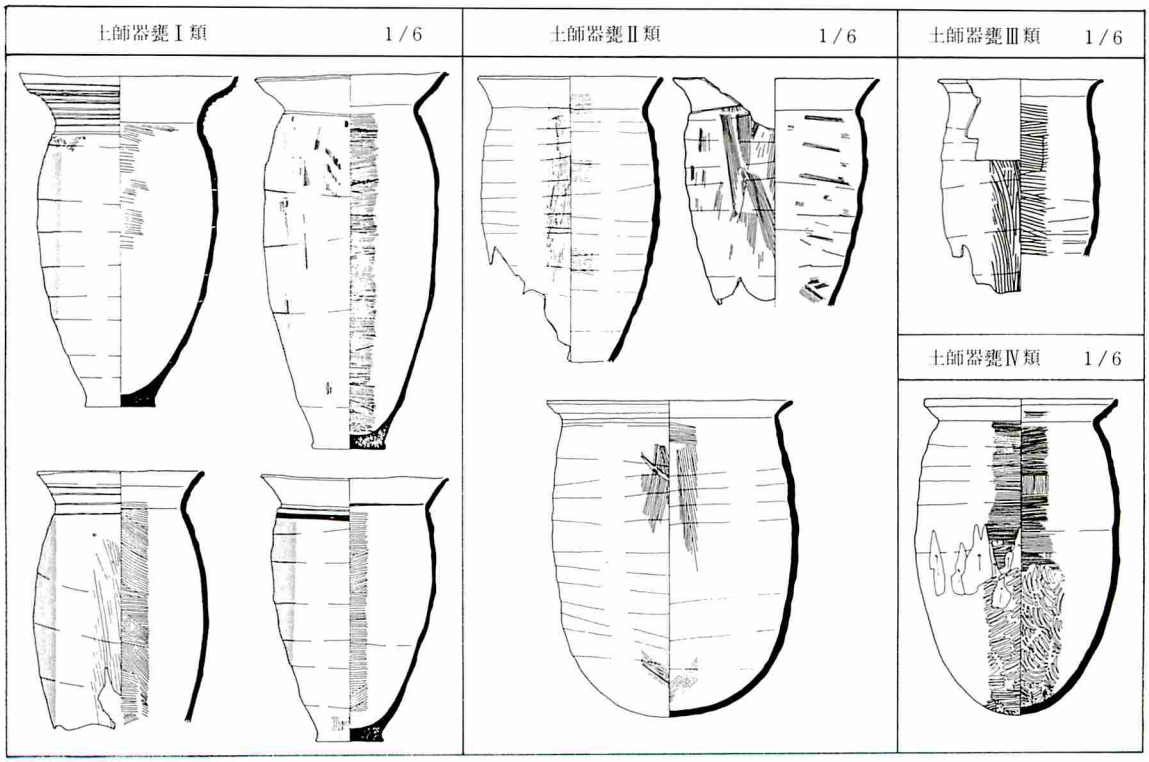
Ⅰ類：頸部から口縁部にかけて数条の段が巡る。口唇部が平坦にならされ，その中に凹みが走っている。胴部外面上半から底辺にかけて縦方向の刷毛目調整が，胴部内面上半から底面にかけて斜あるいは横方向の刷毛目調整が施されている。

Ⅱ類：頸部に段をもち，口縁部が「く」の字状に外反し，口唇部は丸味を帯びる。胴部の調整は，Ⅰ類と同じである。頸部に段をもたず，口縁部が「く」の字状に外反するものをⅡ′類としておく。

Ⅲ類：口縁部がゆるく外反し，胴部外面は縦方向，内面は横方向の刷毛目調整が施されている。

Ⅳ類：口縁部が「く」の字状に外反し口唇部がさらに短く直立している。ロクロ整形の後，胴部内外面上半は横方向の刷毛目により調整され，胴部下半にはタタキが施され，丸底を呈している。

第15次調査地区の第１号住居跡は，比較的遺存状態が良好であり，出土遺物も多い。埋土よりⅠ$\acute{a}$の丸底土師器杯，底面よりロクロ非使用の小形土師器甕・鉢



第13図　土師器甕形土器の分類

が出土しており，８Ｃ後半頃に年代が考えられる。

なお，外郭線外側では，第12次調査地区からも１軒住居跡が検出されているが，出土遺物が少なく，年代が不明である。

第９次調査地区では，第１号，第２号，第４号，第８号Ａ，第９号住居跡から底辺部が丸味をもつⅡＡｃの須恵器杯が出土しており，第８号Ａ住居跡で上記のⅡＡｃ須恵器杯とともに，埋土内出土であるが，Ⅰａ′の丸底土師器杯が出土していることから８Ｃ後半頃の年代が考えられる。ほかに第５号住居跡でロクロ非使用の頸部に段のある小形土師器甕，第８号ＣでⅡ類の土師器甕が出土しており，同年代と考えられる。

後城Ｅ地区の住居跡は，その重複および柵列との関係からＡ・Ａ′・Ｂ・Ｄの各群に分けられ，Ｄ→Ｂ→Ａ′

◇　高野第15次調査地区　―竪穴住居跡内出土土器―

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							土師器甕				その他の出土遺物
			a′	b′	c′	A			B	C							
						a	b	c		a	b	c	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
第１号	地黄		●											●			小形土師器甕　○瓦片 小形土師器鉢　○刀子 ○鉄鏃　○鉄鎌

◇　児桜第12次調査地区　―竪穴住居内出土土器―

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							土師器甕				その他の出土遺物
			a′	b′	c′	A			B	C							
						a	b	c		a	b	c	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
第１号	地黄							○									

◇　神屋敷第９次調査地区　―竪穴住居跡内出土土器―

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							土師器甕				その他の出土遺物
			a′	b′	c′	A			B	C							
						a	b	c	a	a	b	c	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
第１号	地黄							○				○					土師器壺 ○須恵器蓋　○丸瓦片
第２号	地黄							□									
第３号	地黄																
第４号	地黄							○									丸瓦片
第５号	地黄																小形土師器甕　丸瓦片 ○須恵器蓋
第７号	地黄																
第８号Ａ	地黄		○					●									
第８号Ｂ	地黄																丸瓦片
第８号Ｃ	地黄													●			平瓦片
第９号	地黄							●　○									平瓦片

◇ 後城E調査地区 ―竪穴住居跡内出土土器―

住居番号	確認面	住居形態分類	Ⅰ土師器杯			Ⅱ須恵器杯							土師器甕				その他の出土遺物
						A			B	C							
			a′	b′	c′	a	b	c	b	a	b	c	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
SⅠ 160	地砂	ジC															須恵器蓋 ○平瓦片 ○砥石 ○鉄鏃 ○鉄鎌
SⅠ 161	地砂	ジA															○鉄鏃 ○平瓦片
SⅠ 164	地砂	ジA						○ □	○								小形土師器甕 ○平瓦片 須恵器転用円盤状土製品
SⅠ 170	地砂	ジA										●					
SⅠ 176	地砂	ジA															土師器長胴甕
SⅠ 165	地砂	ジA′															○須恵器蓋 紡錘車 ○土錘 ○刀子 ○平瓦片
SⅠ 167	地砂	ジA′															平瓦片
SⅠ 169	地砂	ジA′													●	●	須恵器杯切り離し不明
SⅠ 162	地砂	ジB						□									○須恵器短頸壺 ○鉄鏃 ○平瓦片
SⅠ 174	地砂	ジB															土師器甕
SⅠ 175	地砂	ジB												●			○土錘
SⅠ 177	地砂	ジB															
SⅠ 183	地砂	ジB						○									○土師器甑
SⅠ 187	地砂	ジB						■						●			小形土師器甕 土錘 刀子 ○砥石 ○鉄鏃
SⅠ 168	地砂	ジA															
SⅠ 163	地砂	ジC															小形土師器甕 ○砥石 ○手捏土器
SⅠ 166	地砂																○土錘 ○鉄鎌
SⅠ 171	地砂	ジC															○平瓦片 ○土錘
SⅠ 173	地砂																土師器甕 平瓦片
SⅠ 178	地砂												○	○			
SⅠ 182	地砂	ジD	●										●				土師器内黒高杯・広口壺 須恵器台付杯切り離し不明
SⅠ 185	地砂	ジD															
SⅠ 186	地砂	ジD															
SⅠ 179	地砂	ジD	●○										●				土師器鉢 ○刀子 ○鉄鏃
SⅠ 181	地砂	ジD	○										●				○須恵器蓋
SⅠ 180	地砂												●				
SⅠ 184	地砂																
SⅠ 189	地砂																
SⅠ 172	地砂													○			
SⅠ 190	地砂											○					
SⅠ 191	地砂																
SⅠ 188	地砂																

→Aの順に新しくなると考えられた。ほとんどがいずれかの群に属していることから各群ごとに年代考察を行いたい。

最も古いD群とした住居跡のうちＳＩ179・ＳＩ182住居跡で土器の出土が多く，Ⅰa'の丸底に近い内黒土器杯，Ⅰ類の土師器甕，土師器内黒台付鉢，土師器広口壺等が出土している。またＳＩ180・ＳＩ181住居跡ではⅠ類の底部に笹・木葉痕を浅す土師器甕が出土している。D群は８Ｃ後半頃の年代が考えられる。

Ｂ・Ａ・A′群の住居跡からは，ⅡＡｃの須恵器杯が出土している。この須恵器杯は，台付のものもあるが，底部が平坦で体部とのさかいも比較的明瞭なものである。Ｂ群のＳＩ175・ＳＩ187でⅡ類とした土師器甕が出土しており，丸底を呈するものもある。A′群のＳＩ169では，Ⅲ・Ⅳ類の土師器甕が出土している。Ａ群の住居跡内からの出土土器は少なく，ⅡＡｃの須恵器杯の他に，ＳＩ170住居跡でⅡＣｃ，ＳＩ164住居跡でⅡＢａの須恵器杯が出土している。Ｂ・A′・Ａ群の住居跡については，９Ｃ前半から中頃の年代が考えられる。

Ⅳ　まとめ

第Ⅱ・Ⅲ章において外郭線の内側・外郭線の外側・鵜ノ木地区の三ブロックに分け，検出された竪穴住居跡群の考察を行ってきたが，ここでは，各々のブロックを比較しながら，住居跡の規模・形態・配置・出土遺物の特徴についてまとめてみたい。

〔外郭線内側〕

○外郭線に沿った第10次・第17次調査地区の住居跡は，小規模で，面積が10㎡以下のものが大部分であり，古い時期で最大のものは，16㎡前後である。

○西北部にある第21次調査地区の住居跡の規模は，比較的大きい。ＳＩ303住居跡は56㎡あり，とびぬけて大きい。

○内側の住居跡では，第21次調査地区検出の数軒を除いて，柱穴・周溝が確認されていない。

○第10次・第17次調査地区検出の住居跡は，方形・長方形を呈し，第21次調査地区検出の住居跡に隅丸長方形を呈するものがある。

○出土土器は，杯形土器が多い。ⅡＡｃの須恵器杯とⅢＣｂあるいはⅢＣｃの赤褐色土器杯との共存関係で，年代のちがいが考えられる。第17次調査地区第８層を確認面とする住居跡内からは，ⅡＡｃの須恵器杯，とⅢＣｂ・ⅢＣｃの赤褐色土器杯が多数出土している。

○第17次調査地区では墨書土器，第10次調査地区では砥石・鉄製品の出土が多い。

○第10次調査地区の第２号・第11号ａ・第11号ｃ，第17次調査地区のＳＩ208・ＳＩ225・ＳＩ234・ＳＩ235住居跡では，カマド袖部の補強に瓦が使用されており，第21次調査地区のＳＩ303住居跡では平瓦を，ＳＩ305では格子目瓦を補強に使用している。

○第10次・第17次調査地区の小規模な住居跡の中で群としてとらえられるものがあり，いずれも掘り込みの方位が築地に平行している。

○第21次調査地区では，竪穴住居跡の規模・形態・配列に共通性がない。先に掘立柱建物跡群が構築されていたと考えられ，竪穴住居跡の中で同時期に伴うものは少ない。

○第10次・第17次調査地区では，竪穴住居跡が８Ｃ後半頃あるいは９Ｃ前半頃から10Ｃ以降にかけて継続的に存在している。

〔外郭線外側〕

○後城Ｅ調査地区でＢ群とした竪穴住居跡の規模は，10㎡前後で小さいが，神屋敷第９次調査地区等外郭線外側地区では，21㎡前後が平均規模である。

○小規模なものは方形を呈し，20㎡を超えるものは，長方形を呈するものが多い。

○掘り込みが比較的明瞭なものが多く，周溝を巡し，四隅に柱穴を設けたものがみられる。神屋敷第９次調査地区では，カマド横に灰捨て穴を設けている。

○出土土器としては，ロクロ非使用の土師器甕がカマド内より多く出土している。

○各調査地区より鉄鏃他鉄製品の出土が多い。大小路第24次調査区内上層では，土錘の出土が多い。

○神屋敷第９次調査地区の第１号・第４号・第８号Ｃ・第９号，高野第15次調査地区の第１号，鵜ノ木第20次Ｂ調査地区のＳＩ298，後城Ｅ調査地区のＳＩ161・ＳＩ167・ＳＩ173住居跡では，カマド袖部の補強に瓦を使用している。神屋敷第９次調査地区の大部分の住居跡内より瓦片が出土している。

○大小路第24次調査地区の下層にある住居跡は，外郭線との空白地帯をおいて配置されている。

○大小路第24次調査地区では，外郭線がなくなった

後に，規模の大きい住居跡群が構築されている。

○後城Ｅ調査地区では，柵列に区画された住居跡群が存在する。

○後城Ｅ調査地区と神屋敷第９次調査地区では，８Ｃ後半頃から９Ｃ前半頃，高野第15次調査地区でも，８Ｃ後半頃とする秋田城でも古い時期に属する集落跡が検出されている。

〔鵜ノ木地区〕

○カマドをもつ住居跡は，20㎡前後と15㎡前後の規模のものに分かれ，カマドをもたない竪穴は，10㎡前後の規模の小さいものが多い。

○カマドをもつ竪穴住居跡とカマドをもたない竪穴は，共に壁に沿って周溝が巡り，隅に柱穴を設けたものが多い。

○出土土器は，ⅢＣｃの赤褐色土器杯とⅡＡｃあるいはⅡＣｃの須恵器杯が共存している。土鍋と思われる大形の鉢も出土している。

○住居跡の年代は，９Ｃ後半頃に考えられ，一時期に集中している。

上記のまとめにより，外郭線内側にあたる※鵜ノ木第10次調査地区・大小路第17次調査地区下層の住居跡は，小群を形成し，築地と平行な掘り込み方位で配置されている。※外郭線に近い外側にあたる大小路第24次調査地区下層の住居跡は，外郭線と空白地帯を設けて構築されている。※外郭線からかなり離れた後城Ｅ調査地区では，柵列で区画された住居跡がある。という住居跡の配置上の特徴がとらえられる。年代についてはまだ再考を要するが，９Ｃ中頃までは，秋田城の内側はもちろん，外郭線近く，離れた一般集落におよぶまで居住地域については一定の規制が働いていたと考えられる。

また秋田城内においては，焼山第21次調査地区のように比較的内城域に近いところには掘立柱建物跡を配置し，内城域より遠いところには，竪穴住居跡を配置するというような配置のちがいがみられる。その竪穴住居跡についても，鵜ノ木第10次調査地区では，鉄製品が多く出土し，大小路第17次調査地区では，墨書土品が多く出土するという機能的分化を示唆する様子がみられる。さらに奈良時代前半においては，移配柵戸の単位は一戸を対象としていたのに対して，８Ｃ後半頃より個人を対象としたものに変って行ったとされ[4]，秋田城外郭線内側にあたる第10次・第17次調査地区内の小規模な住居跡は，上記事象を裏付けていると考えられる。

この稿を書くにあたり，秋田城跡発掘調査事務所の小松正夫氏，日野久氏より貴重なるご教示，資料の提供を得た。末筆ながら感謝する次第である。

注

1) 昭和53年度秋田城跡発掘調査概報Ｐ70より抜粋。

2) 昭和50年度払田柵跡発掘調査概報Ｐ24を参照。

3) 昭和53年度後城遺跡発掘調査報告書Ｐ160～Ｐ161を参照。

4) 板橋源『柵戸考』において

「757年頃以前においては柵戸はすべて『戸』単位で移配されていたのに対して，757年以後はすべて『人』単位で移配されている。」ことを指摘している。

※ 本稿では，竪穴住居跡位置図の他挿図の全てを昭和47～56年度秋田城跡発掘調査概報から転載させていただいた。

引用・参考文献

秋田市教育委員会　昭和47年度秋田城跡発掘調査概報
〃　48
〃　49
〃　50
〃　51
〃　52
〃　53
〃　54
〃　55
〃　56
菊田徹　「多賀城内発見の竪穴住居跡」
宮城県多賀城跡調査研究所　研究記要Ⅲ
秋田県教育委員会　払田柵跡調査事務所年報1975
板橋源　「陸奥出羽柵柵戸移配変質考」
岩手大学学芸学部研究年報　第５巻
秋田市教育委員会　昭和53年度後城遺跡発掘調査報告
板橋源「柵戸考」
岩手大学学芸学部研究年報　第２巻